

筑波大学附属図書館 年報 2024 年度



University of Tsukuba Library

Annual Report

2024



目次 Contents

1. 館長挨拶	1
2. 巻頭特集	2
特集記事①オープンアクセス推進に向けた取り組み	2
国のオープンアクセス方針とオープンアクセス加速化事業について	
附属図書館Webサイト「附属図書館のオープンアクセス支援」ページについて	
グリーンOA つくばリポジトリによる公開体制の拡充	
ゴールドOA 戦略的APC支援と転換契約締結	
特集記事②「つくば型チュートリアル学修」授業支援	6
「学問探究チュートリアル」の開講とつくば型チュートリアル学修	
つくば型チュートリアル学修を支援する図書館の取り組み	
チュートリアルの本棚から	
3. フォーカス（2024年度の特徴的な活動・事業）	12
1）書架工事等による資料利用環境の向上	
2）中央・大塚図書館に防音ブースを設置	
3）大学図書館職員長期研修を一部対面形式で開催	
4）2024年度特別展「忠孝一本－江戸時代のモラリティ」開催	
4. 職員の活動	15
①研修参加報告	15
1）障害者サービス担当職員養成講座（入門）への参加	
2）令和6年度茨城県図書館協会初任者研修会（第1回、第2回）への参加	
3）「大学図書館員のためのIT総合研修」への参加	
4）湘南リゾート2024夏：若手ライブライアンによる将来のOA等施策調査検討合宿	
5）2024年度大学図書館職員短期研修への参加	
6）国立大学図書館協会東京地区協会・関東甲信越地区協会合同フレッシュパーソンセミナーへの参加	
②海外出張報告	18
1）マレーシア出張報告 2）フランス出張報告 3）アメリカ合衆国出張報告 4）メルボルン出張報告	
③その他の活動	23
1）研修における講師等 2）職員研修会	
5. トピックス	25
1）サービス・活動 2）イベント・セミナー・授業 3）展示 4）見学・来訪者	
5）オリエンテーション・講習会 6）研修・シンポジウム 7）会議 8）研究開発室	
6. メディアに見る附属図書館	30
1）学内外のメディアに掲載された当館に関する記事	
2）筑波大学附属図書館の刊行物	
3）筑波大学出版会の刊行物	
7. 附属図書館ボランティアの活動	31
8. 組織図・歴代図書館長	32
9. 統計	33

表紙写真

上：「学問探究チュートリアル」授業の様子（中央図書館）
下：中央図書館と飛行機雲

裏表紙写真

上左：大塚図書館 開架書架
上右：医学図書館 集密書架（資料クリーニング中）
下左：図情図書館 展示「浮世絵を読み解く～江戸の人々のくらし～」
下右：体芸図書館 どこから見た風景か、探してみてください！

※本冊子に記載の所属・役職は全て2025年3月31日現在のものです。



副学長(企画評価・広報担当)・附属図書館長

西尾 チヅル

平素より、当館の運営に深いご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。「筑波大学附属図書館年報2024」を発行いたしましたので、ご覧ください。

2024年度は、本学が文部科学省の「オープンアクセス加速化事業」に採択されたことを受けて、オープンアクセス（OA）の推進に向けた取り組みを活発に進めた一年でした。また、本学が進める「つくば型チュートリアル学修」の一環として今年度開講された「学問探究チュートリアル」の授業の一部が中央図書館で実施されたことから、「チュートリアルの本棚」の設置をはじめとする様々な協力を行いました。改めてこの一年間の活動を振り返り、ご紹介いたします。

オープンアクセス加速化事業で実施した取り組みの中でも大きな柱となるのが、論文をOAにするために必要な「論文掲載料（Article Processing Charge：APC）」の支援です。本学のOA推進体制を整備するために設置した「オープンアクセス推進会議」により支援策を策定し、2024年7月22日から2025年3月14日までにOA出版した論文に対して、APCの補助を行いました。また、全学で整備している電子ジャーナルパッケージのうち大手5社について、出版社への支払い総額を大幅に抑えてOA出版枠を確保することができる「転換契約」への切り替えを2025年から開始し、本学構成員がOA出版を行う際のAPCの負担を軽減しています。また、OA推進体制のもう一つの柱として、つくばリポジトリの整備が挙げられます。関連規程の改正やシステム調整により、「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」でOA義務化の対象となる根拠データ等の公開にも対応し、2025年3月4日には本学では初となる研究データの公開を行いました。つくばリポジトリでは今後も幅広いコンテンツの登録や公開を進め、本学の研究成果を広く発信していきます。附属図書館のOA推進の取り組みについては、特集1で詳しくご紹介しています。

「つくば型チュートリアル学修」の授業への支援として、附属図書館では、ワークショップや個別対話の場として本館2階のラーニング・スクエアを

提供し、授業やイベントの際の設営補助、チューター教員の推薦図書を紹介する「チュートリアルの本棚」の展示、ラーニング・アドバイザーによるワークショップへの協力等を行いました。特にチューター教員が学生に推薦する図書を写真やコメント付きで展示した「チュートリアルの本棚」は、展示された図書の利用も大変多く、チュートリアル学修の広報としても有効であると考えて通年での展示を行うこととしました。チュートリアル学修関連の話題は、特集2として取り上げています。

このほか、地域・社会貢献の一環としての所蔵資料の展示も継続して行っています。2024年10月29日から11月22日まで、附属図書館特別展「忠孝一本ー江戸時代のモラルティー」を開催しました。江戸時代の人々の生活や価値観、道徳観について、関連する所蔵資料40点を展示して紹介したものです。11月6日には本学教員による特別講演会を開催し、学内外の多くの方に貴重な資料をご覧いただきました。

また、今年度は従来から課題となっていた館内の利用環境の整備にも取り組みました。2024年11月から2025年3月にかけて、中央図書館の書架の狭隘化に対応するため固定書架の撤去と集密書架の設置を行い、老朽化した電動集密書架を手動集密書架に交換したほか、中央図書館と医学図書館で空調工事や資料の燻蒸作業によるカビ対策を実施しました。更に2024年11月には中央図書館と大塚図書館に防音ブースを設置しました。この防音ブースは新たな学習空間の一つとして、オンライン授業やゼミの受講、学会への参加等の目的でよく利用されています。今後も利用者のニーズを把握し、良好な利用環境の提供に努めます。

今後も附属図書館が皆様の教育・研究活動の一助となりますよう、様々なサービスの充実を図ってまいります。引き続き、附属図書館の活動へのご理解とご支援の程をよろしくお願い申し上げます。

(2025年3月31日)

オープンアクセス推進 に向けた取り組み

国のオープンアクセス方針とオープンアクセス加速化事業について

1. OA、世界の動きと日本の対応

オープンアクセス（以下、「OA」という。）は、**学術情報をインターネット上で無償公開することにより、研究成果へのアクセスの公平性と利活用を促進する取り組み**です。その理念が広がり始めたのは2000年代初頭であり、2002年のブダペスト・オープンアクセス・イニシアティブ（BOAI）を契機に、世界的な動きが本格化しました。以降、OAは20年以上にわたって段階的に発展を遂げてきました。

日本においては、**オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）**などの枠組みのもと、主に機関リポジトリを活用した「**グリーンOA**」を推進してきました。筑波大学をはじめ多くの大学がリポジトリを整備し、学術雑誌に掲載された所属研究者の著者最終稿や大学紀要の掲載論文を登録・公開しています。一方近年では、学術出版社が提供する、フルOAジャーナルやハイブリッドジャーナルに、研究者が論文掲載料（APC：Article Processing Charge）を負担してOA出版する「**ゴールドOA**」モデルも普及し、OAの実現手段は多岐にわたるようになっていきます。

このような流れの中、2023年に開催されたG7広島サミットにおける共同声明において、「**FAIR原則に沿った研究成果や研究データのオープン化推進**」が明記されました。これを受け、国内でも本格的なOA方針の策定が進められ、内閣府の**総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）**が中心となって政策対応が強化されています。さらに、「**研究データ管理（Research Data Management, RDM）**」を含むオープンサイエンスの推進に関する答申やガイドラインも整備され、学術情報流通基盤の高度化に向けた動きが加速しています。

【参考Webサイト】

研究DX（デジタル・トランスフォーメーション）－オープンサイエンス：学術論文等のオープンアクセス化の推進、公的資金による研究データの管理・利活用など－（内閣府）

<https://www8.cao.go.jp/cstp/kenkyudx.html>

2. 即時OA義務化とオープンアクセス加速化事業

日本政府は、OA推進の一環として、研究成果の「**即時OA**」を原則とする方向性を明確に打ち出しました。「**統合イノベーション戦略2023**」（2023年6月閣議決定）により、**2025年度以降に採択される科学研究費などの公的研究資金による研究成果について、即時公開を原則義務とする方針**が示されました。更に2025年2月に「**学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針**」及び同方針の

実施にあたっての具体的方策が公表され、義務化対象が明確に示されました。（各文書は前項【参考Webサイト】にて閲覧可）

これらの国の方針決定と並行して、100億円の補正予算（2023年度）を原資とする「**オープンアクセス加速化事業**」が、2024年3月に文部科学省から公募され、同年7月下旬に、筑波大学を含む83機関（国立大学53、公立大学5、私立大学20、大学共同利用機関5）が採択されました。

オープンアクセス加速化事業は、各大学等の即時OAに向けた、体制整備・システム改革を加速させることを目的としたもので、採択決定日から2025年3月31日までを事業期間として、機関リポジトリを含む研究成果の管理・利活用システムの開発・高度化、OAを推進する学内体制の強化及び戦略的なAPC支援の実施など、幅広い施策を支援対象として実施されました。採択機関は、研修会の開催やJPCOARが運営するSlackなどを通じて活発に情報交換を行い、互いに学び合いながら事業を行いました。本事業を通じて収集・公開された成果は、国内のOA推進におけるベストプラクティスとして共有され、実践が広がっていくことが期待されます。

また、大学の現場では、即時OA義務化に向けた体制整備だけでなく、**研究者への情報提供や理解促進、業務担当者の育成といった支援活動**が重要性を増しています。本事業は、こうした課題に包括的に対応するための機会を提供し、各大学における持続可能なOA推進体制の構築に重要な役割を果たしています。

3. 附属図書館のOA推進への取り組み

筑波大学は、早くからOAの重要性を認識し、学内の研究成果を広く公開するための基盤として、2006年に「**つくばリポジトリ**」を公開し運用してきました。2015年には「**筑波大学オープンアクセス方針**」を策定し、つくばリポジトリを通じてOAを推進することを大学として明言しています。なお、つくばリポジトリは、本学研究者の学術雑誌掲載論文、学位論文、紀要論文、研究報告書など多様なコンテンツを登録対象としており、国内有数の登録数を誇っています。（2025年3月末時点の登録数：67,320点）

こうした活動を継続的に進めていくために、附属図書館はリポジトリ業務を専任とする係を2007年4月に設置し、特に**学術雑誌掲載論文の登録**に注力してグリーンOAの普及に成果を上げてきました。また、JPCOARの運営委員会委員や作業部会員を歴任し全国的なリポジトリ・コミュニティを支援・強化する活動にも寄与してきました。

一方で、これらの取り組みは図書館業務の枠に留まっており、学術

オープンアクセス推進 に向けた取り組み

出版社の動き（ゴールドOAによるOA出版の増加）も含めた包括的なOA推進という観点からは、全学的な対応方針が明確でない側面がありました。

そのような中、オープンアクセス加速化事業を契機として、筑波大学では全学的なOA推進体制の構築に向けた取り組みが始まりました。2024年6月に学長直下に「オープンアクセス推進会議」が新たに設置され、研究担当副学長（議長）、附属図書館長（副議長）、財務担当副学長、研究組織の長等を構成員とする検討体制が確立し、全学的な方針の策定と具体的施策の検討が行われています。

この会議を基盤に、**海外学術出版社5社の「転換契約」導入**や、オープンアクセス加速化事業による**APC支援制度**の検討など、OA促進を支える複数の施策が実施されました。特に転換契約の導入によるOA出版枠の確保は、今後の持続的なOA促進基盤を整備できたという意味で大きな成果です。

また、本事業の支援を受けて、つくばリポジトリと連携する「TRIOS（筑波大学研究者総覧）」のシステム改修や登録支援ツールの開発、本学研究者を対象とするOA意識調査の実施と分析、学术论文のOA化状況の分析、OA支援情報をまとめたWebページ公開や広報物の配布、筑波大学がけん引するオープンリサーチ出版ゲートウェイ「JIG（Japan Institutional Gateway）」の認知度向上、国内外の先進事例調査などにも取り組みました。これらの施策を通じて、TRIOSの利便性向上、学术论文登録業務の省力化、JIG参加機関の増加が実現でき、本学研究者のOA理解も進みつつあります。さらに、本事業でOA業務体制充実のための図書館環境整備が認められたことから、中央図書館の集密書架設置工事等を行ってOA業務の-effortを捻出し、OA関係の職員増強と附属図書館全体で広報活動等を行う「オープンアクセス推進ワーキンググループ」を新設することができました。

本稿で述べたOA推進の具体的な取り組みについては、次ページ以降や「3. フォーカス」で詳しく紹介しますが、これらを通じて、附属図書館の活動は、大学全体の研究戦略と緊密に結びつくものとなってきています。今後も、関連部局との協働のもと、研究者との対話を重ね、つくばリポジトリのさらなる活用促進、OA化率の向上、また、学术论文公開と同様に重要事項である「研究データの管理・公開の促進」を含めた、総合的なオープンサイエンス支援へと発展させていくことが求められます。附属図書館は、従前からの取り組みやオープンアクセス加速化事業を通じて得た知見を活かし、業務体制を一層充実させ、OA推進に継続的に取り組んでまいります。

（学術情報部情報企画課長 加藤 さつき）

附属図書館Webサイト「附属図書館のオープンアクセス支援」ページについて

2024年12月、附属図書館Webサイト内に、附属図書館のOA支援についてまとめたページ「附属図書館のオープンアクセス支援」を新設しました。



この特集でも紹介している、OAを実現するための2つの方法「グリーンOA」「ゴールドOA」それぞれについて解説し、附属図書館ではどのような支援を行っているのか、関連ページへのリンクも含めた、より詳しい情報を提供しています。このページは今後も随時更新していく予定ですので、ぜひチェックしてみてください！

論文をOAにするには？

OA実現の方法としては、次の2つがあります。

「グリーンOA（セルフアーカイブ）」

大学等が購読・運用する機関リポジトリ等で論文をOAにする方法です。筑波大学所属の研究者は、つくばリポジトリに論文を登録することで、OAにすることができます。論文が学術雑誌へ掲載されましたら、リポジトリ担当にご連絡ください。

※リポジトリへの登録は、査読済み最終稿（著者最終稿）のみを認めるという規定を設けている出版社が多くあります。また、出版社や雑誌によっては、著者最終稿の公開にあたって一定の公開猶予期間（エンバーク）を設けている場合もあります。

- つくばリポジトリ
つくばリポジトリ (Tulips-R) とは
- リポジトリにコンテンツを登録しよう
リポジトリを利用するコンテンツの登録
TRIOSを利用したコンテンツの登録 (要ログイン)

「ゴールドOA」

著者が論文出版料（APC：Article Processing Charge）を支払うことにより、その論文をOAにする方法です。ジャーナルには、以下の2つのタイプがあります。

- フルOAジャーナル：そのジャーナルの全ての収録論文が無料でアクセスできるもの
- ハイブリッドジャーナル：購読型ジャーナルだが、著者がAPCを支払った論文だけOA化されるもの

※ オープンアクセス出版を行うジャーナルの中には、APCの収支を目的とした相乗り型（いわゆる「ハイブリッドジャーナル」）も存

「附属図書館のオープンアクセス支援」ページの一部

オープンアクセス推進

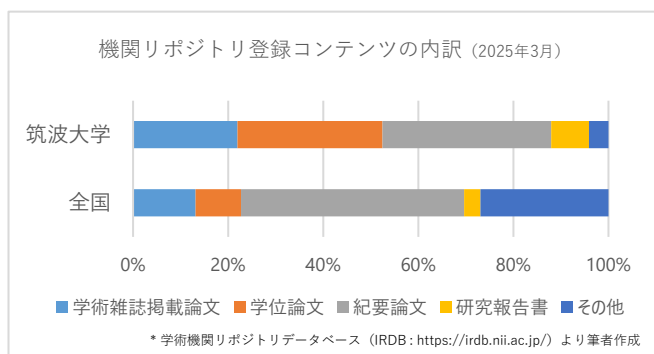
に向けた取り組み

グリーンOA | つくばリポジトリによる公開体制の拡充

1. これまでの取り組み

大学等が構築・運用する機関リポジトリ等で論文をOAにする方法を「グリーンOA」と言います。筑波大学では全国に先んじて、このグリーンOAの取り組みを進めてきました。その公開の基盤となるのが「つくばリポジトリ」です。

つくばリポジトリは2006年3月に公開を開始しました。2024年度末時点で67,320件のコンテンツを、誰もが無料で見られる形でインターネット上に公開しています。割合順にみると学内紀要論文、博士学位論文に次いで、学術雑誌掲載論文が22%を占めています。全国では13%程であることから、突出して高い割合であることが分かります。筑波大学では従来からこうした本学以外で発表された研究成果のOA化にも積極的に取り組んできました。



2015年11月には、全国でも最初期に「筑波大学オープンアクセス方針」(*1)を採択しました。この方針に基づき、附属図書館では本学教員等による論文情報を論文データベースから定期的に収集し、各教員からの公開可能な原稿の提供を受けながら電子ファイルのリポジトリへの登録と公開を進めてきました。教員が業績を登録するTRIOSにもリポジトリへの登録を希望する機能を設け、教員からの自発的なセルフアーカイブの需要にも対応しています。

2. 課題への対応

しかし、これまでの取り組みにはいくつかの課題がありました。海外誌に比べて国内誌に掲載された論文の登録が少ないこと、コロナ禍を経て学内紀要等の刊行や登録が滞っていたこと、将来の業務フローを見据えたTRIOSの改善などです。2024年度はこれらに加えて、2ページ目で触れられた国のOA方針に即して論文だけでなく研究データの公開にも対応していける体制を整えることも必要になりました。

国内誌のうち学外の学会や協会が発行する学術雑誌について、従来はこれらに掲載された学内教員による論文等を網羅的に捕捉する手段がありませんでした。これについて、オープンアクセス加速化事業経費により公的資金による助成を受けた論文等を抽出してリスト化するツールを新たに開発し、即時OA義務化の対象論文の全体像を把握できる体制を整えました。

学内紀要については、2019年前後からの環境の変化に伴い登録に数年分の抜けがあったものについてあらためて調査を進め、冊子の所蔵はあるがリポジトリに未登録のもの、あるいはその逆のものについて発行元に連絡を取りながら補充を進めました。中には行動様式の変化に伴い数年間発行を中止していたタイトルもありましたが、紙での発行を中止して電子のみに移行するにあたり必要な手続きをサポートし、つくばリポジトリを出版プラットフォームとしていただくことで再スタートできたものもあります。

3. 研究データの公開

即時OA義務化の対象には論文だけでなく、その根拠データも含まれます。出版社のWebサイト上に本文と並べて掲載されるグラフや元となる数値、画像といった論文の根拠となるデータのことです。「研究データ」という場合にはこれらに加えて、文献リストや記録ノートといった研究の過程で収集・生成されるありとあらゆるものが含まれます。こうした研究データの公開について、筑波大学では2024年4月に「筑波大学研究データポリシー」(*2)として大学全体の方針を定めました。

研究データの中には取り扱いに注意を要するものもあり、オープン・アンド・クローズ戦略に基づき公開の判断は各研究者に委ねられます。附属図書館では教員からのデータ公開の依頼に備えて2024年度中に関連規程を改正し、研究推進部外部資金課やURAとも協力体制の構築を進め、2025年3月には第1号となる研究データ(*3)と、これに紐づく学内紀要論文(*4)の登録・公開を実現しました。

4. 2025年度以降の取り組み

業務用ツールの開発と研究データの受け入れ体制が整ったところで、2025年度以降はこれらを日常の業務フローに落とし込み、学内教員に広く利用していたできるよう周知していくことが課題となります。筑波大学及び附属図書館は即時OA義務化の対象となるものに留まらず、その意義に照らして広く共有すべき研究成果・研究データについて、つくばリポジトリを通してグリーンOAにより公開し、オープンサイエンスの発展に貢献していきます。

(リポジトリ係長 石津 朋之)

参照：

*1) <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/service/repository-oap>

*2) <https://ura.sec.tsukuba.ac.jp/research-compliance/about-research-data-2>

*3) Taisei SHIDA. A New Edition of Śālikanātha's Nyāyaśuddhi. 2025-02-24.

<https://doi.org/10.15068/0002014314>

*4) Taisei SHIDA. Editorial Notes on Śālikanātha's Nyāyaśuddhi. 哲学・思想論集. vol. 50, p. 67-88, 2025-03-28.

<https://doi.org/10.15068/0002014440>

オープンアクセス推進

に向けた取り組み

ゴールドOA | 戦略的APC支援と転換契約締結

1. オープンアクセス加速化事業による APC支援

OAを実現するもう一つの方法として「ゴールドOA」があります。これは、著者が出版社に論文掲載料（APC：Article Processing Charge）を支払うことにより、その論文をOAにする方法のことを指します。世界的にOAを含むオープンサイエンスが求められる一方で、従来の電子ジャーナル購読料の高騰問題に加え、高額なAPCやその負担の増加が課題となっています。

これらの課題を踏まえ、本学では、OAに係る方針・戦略を策定するための組織として「オープンアクセス推進会議」を設置しました。学長直下に関係副学長、各組織の長等をメンバーとした組織を設置したことで、OA推進のための方策を検討できる全学的で強力な体制を整えることができました。

オープンアクセス加速化事業経費によるゴールドOAの支援策についてもこの会議で検討を行い、APC支援策として、①戦略的APC支援、②転換契約によるAPC支援、③Japan Institutional Gateway（JIG）でのAPC支援の3つを柱とし、実施することとなりました。本稿では、附属図書館が実施した①、②のAPC支援についてご報告します。

アクセス加速化事業経費によりAPC負担なしで、4月以降はAPCの一部を負担するだけで、OA出版が可能となりました。

【転換契約対象パッケージ】 Cambridge University Press、Oxford University Press、SpringerLink (Springer Nature)、Wiley Online Library、ScienceDirect (Elsevier)



附属図書館は、論文のオープンアクセス出版を支援します!

2025年度の新規公募分からの助成金により、助成を受けた研究成果論文の即時オープンアクセス (OA) が義務化されます。(裏面参照)

2025年1月から転換契約によるOA出版が可能となりました。

注:ジャーナル購読料とOA出版料の包括的契約

対象 各社のハイブリッドジャーナル (一部の例外あり)

- Cambridge University Press
- Oxford University Press
- SpringerLink (Springer Nature)
- Wiley Online Library (Wiley)
- ScienceDirect (Elsevier) 4月以降

●2025年1月～3月
文部科学省補助金により
自己負担なしでOA出版が可能です

●2025年4月以降
一部自己負担でOA出版が可能です

広報ちらし

2. 戦略的APC支援

本学では事業採択時点で、後述する転換契約を行っていなかったことから、まずは、戦略的APC支援として、すべてのジャーナルを対象として、本学の教職員がOA出版の際のAPCの補助を行いました。広報は、支援室等を通じたメールでの案内、広報ちらしの配付、教職員専用サイトを使って行いました。当初は申請が伸びませんでしたが、徐々に広報が浸透し、少しずつ申請が伸びていきました。8月から開始した支援は、最終的には、論文約200件となりました。

3. 転換契約によるAPC支援

もう一つの実施策として、全学で整備している電子ジャーナルパッケージのうち、大手5社を転換契約に切り替え、2025年1月から（Science Directのみ4月から）論文掲載料（APC）の支援を開始しました。転換契約とは、購読モデルからOA出版モデルへの転換を目的とする契約で、出版社への支払い総額を大幅に抑えてOA出版枠を確保することができる契約です。この契約により、対象となるジャーナルに本学構成員がOA出版の際、著者は、2025年1月から3月までの間はオープン

4. ゴールドOAの今後について

論文をOAにすると、ビジビリティが上がり、引用数も増えるといわれており、2025年度からは、国の即時OAの運用も開始されます。こうした中で、今回のAPC支援により、OAのメリットを体感いただき、これまでOAにしてこなかった方々のマインドチェンジのきっかけとなり、機運の醸成、OA化が加速されることを期待しています。

転換契約による支援は4月以降も続きますが、APCが高額である問題や、転換契約対象外のジャーナルへの支援等、課題は残ります。附属図書館は、研究支援戦略を担当する部局と連携し、その支援に協力していきたいと考えています。

（情報企画課主幹 廣田 直美）

「つくば型チュートリアル学修」

授業支援

「学問探究チュートリアル」の開講とつくば型チュートリアル学修

1. 「学問探究チュートリアル」の開講

2024年5月の春Bモジュールから、あらたに総合科目（学士基盤科目）として「学問探究チュートリアル」を初年次生向けに開講しました。募集人員40名の選択履修科目としています。初年次に必修としている総合科目「学問への誘い」では、本学がカバーする学問分野を全学群について紹介するとともに、大学における学問や探究のあり方も紹介しています。それに続き、チューター教員からの助言も得ながら、受講生自らがその探究の方法を試みることができるように設計しているのが「学問探究チュートリアル」です。まだ探究してみたい対象がはっきりしていない学生もいるかもしれませんが、その場合でもチューター教員が、その対象を探していく動機付けができるように対話をします。学問としての問いの立て方や、その問いに対する答をどのようにして探究していくのかについて、学生自身の気づきを大切にしながら、学問の入り口に立つ初年次生を導いていきます。初年次の学生と、世界の第一線で研究に邁進している本学の様々な分野の教員とが、共に直接語りあう機会となることも大きな特徴です。

この授業がよく成立するためには、受講する学生と教員とが、様々な議論や相談を円滑にできることが必要です。そこで授業の工夫として、春Bモジュールの5週間は、受講生と担当教員が一堂に会し、互いの自己紹介やワークショップをグループで行うことで相互の会話を格段に

増やし、互いの意思を疎通しやすくする工夫をしています。このワークショップを経て、春Cモジュールから、学生2人と教員2人が組になって対話を始めるようにしています。

そこで重要になるのが、このワークショップや対話を行う場所です。自分の興味を持



学問探究チュートリアル紹介パンフレット
<https://tutorial.edu.tsukuba.ac.jp/pamphlets>

った対象に探究を深めていくには、まず先人が積み上げた知恵を学ぶところから始めるものです。その知が集積しているところといえば、伝統的には図書館ということになります。もちろん、最近ではネットワークにつながったパソコンさえあれば、様々な調べをすることはできますが、それだけでは頼りなく、やはり、現物としての書籍や論文などの資料を手にとることができる場所で探究を始められるところ、すなわち図書館が、当科目を本学で初めて開設するにあたって、象徴的にも現実的にもふさわしいところと考えられました。幸い、後のページに解説がありますように、図書館の職員の皆様の深いご理解とご協力があり、この科目の会場を中央図書館にして始めることができました。なお、当科目は学群教育会議の下に設置された「チュートリアル学修推進委員会」により実施されています。

2. つくば型チュートリアル学修

「チュートリアル」といえば、Oxford大学*やCambridge大学で行われているものが有名ですが、本学では、本学の特性に合わせた個別指導的な要素をとり入れた学修を、今後10年近くをかけて独自に創り上げていこうとしています。これを「つくば型チュートリアル学修」と呼ぶことにしました。学修プロセスの骨子を6段階に整理し（左下の図にあるリンクからパンフレットをご参照ください）、学年が上がるにしたがって、専門色が濃くなる流れとしています。上に述べた「学問探究チュートリアル」は、そのうちの初年次において、学生一人一人の問題意識が導く問いや、その問いをどのように探究していくとよいのかを、ワークショップやチューター教員とともに深めていくプロセスに位置付けられます。2年次以降のチュートリアル学修を実際に実装していくことは、それぞれの教育組織にゆだねられますが、チュートリアル学修推進委員会がそのイニシアティブをとっていくことになります。

このようなチュートリアル学修は、2022年度から本学が指定を受けた指定国立大学としての計画のなかで構想されています。上に述べた学修プロセスもその構想を芯に据えて議論を重ねて作成しました。この構想では、問題解決指向にのっとった思考（デザイン思考）が涵養されることを主眼に、学生が、真に社会での課題解決を指向する方向に、また学問や物事を究め続ける方向に導かれるような教育への充実を求めています。各位の、この真意への深いご理解とともに、初年次向け「学問探究チュートリアル」や2年次以降のチュートリアル学修への全学での実装・実践が進むことを期待しております。最後になりますが、本学附属図書館の皆様の多大なご支援・ご協力に感謝を申し上げます。

* 荻谷剛彦/石澤麻子「教え学ぶ技術―問いをいかに編集するのか」ちくま新書1436。

（チュートリアル学修推進委員会 委員長 坪内 孝司）

「つくば型チュートリアル学修」

授業支援

つくば型チュートリアル学修を支援する図書館の取り組み

1. 支援内容の検討・サービス方針策定

つくば型チュートリアル学修は、本学が2024年度からおよそ10年かけて導入する本学独自の新しい教育です。その一環として2024年度から学群1年生対象（定員40名）総合科目（学士基盤科目）「学問探究チュートリアル」の授業が開講され中央図書館を会場として実施されることとなりました。そこで、授業開始に向けた準備として2023年度後半より、教学デザイン室・教育推進部教育機構支援課との連携のもと、図書館でどのような支援ができるかを検討してきました。

この「学問探究チュートリアル」の科目は、学生の個性と主体的な学びを重視し、ひとりひとり異なる多様な分野の関心テーマをワークショップやチューター教員との対話を通して学問的な問題意識として深め、大学における各自の今後の学修プランを作成していく授業です。

一方、図書館は、「附属図書館の使命と目標」において、豊かな人間性及び創造的な知力を蓄えた人材を育成するという筑波大学の目標を実現するために、図書館が学習・教育・研究活動の支援に不可欠な学術情報基盤としての機能を担うことを使命として掲げてきました。

このことから、つくば型チュートリアル学修の導入の初年度に創造性豊かな思考力と行動力で未来をデザインできる力を育む「学問探究チュートリアル」の授業が開講されるにあたり、図書館がそれを支援することは、かねてより掲げてきた「使命と目標」に合致することと捉えています。

図書館はこれまでも蔵書・施設・サービスの提供を通じて学習支援・教育支援をしてきましたが、「学問探究チュートリアル」のような1つの科目に年間を通して密接に関わり、科目を担当する教職員と積極的に連携しながら支援していく取り組みは前例がありませんでした。そのため、支援を開始するにあたり、図書館として提供できる内容を検討し、館内の職員の共通認識とする意味で2023年度末に「チュートリアル教育を支援するための図書館サービス方針」を作成しました。

この「方針」に挙げたサービス項目は大きく分けて以下の4つです。

- （1）授業における図書館施設の活用
- （2）チューター教員の推薦図書を紹介する本棚の設置
- （3）履修学生に対する人的サービス
- （4）広報・成果物展示への協力

これに沿って、2024年度から実際の授業支援を開始しました。

2. 中央図書館ラーニング・スクエアでの「学問探究チュートリアル」授業実施

・授業における図書館施設の活用

中央図書館本館2階には「ラーニング・スクエア」という名称の会話可能なオープンスペースがあります。ここには用途に応じたスペースを用意しており、「ギャラリーゾーン」（展示やイベントを実施可能なスペース）、「チャットフレーム」（グループ学習に適した座席があり、イベントも実施可能なスペース）があります。通常は予約なしで利用することができ、日常的に個人・グループでの学習に利用している学生が多いますが、一定の時間帯を予約して授業やイベント等での利用も可能です。

このラーニング・スクエアで2024年5月から2025年1月まで水曜3・4限を中心に「学問探究チュートリアル」の授業が実施されました。



授業の様子

・ワークショップ・グループワーク（計6回）

2024年5月～6月・夏休み明けの10月の授業では、担当教員がこれまでの研究人生を振り返って紹介するワークショップや、グループに分かれて対話しながら個々の学修プランを練っていくワークショップが計6回実施されました。履修学生36名と担当教員27名が集まり、ラーニング・スクエアに知的な賑わいが生まれました。

・個別対話（計6回）

2024年7月・10月～12月には、学生2名・教員2名で一組となり「個別対話」が実施されました。ワークショップのように全員が同じ曜日・時間に集まることはなく、3～6限のいずれかの時間帯で同時に一組～二組ずつが来館し、チャットフレームや、新設の4人用防音ブースが利用されました。

「つくば型チュートリアル学修」

授業支援

・ラーニング・アドバイザーの協力

6月に実施された第3回のワークショップ授業には、図書館で日頃活動している「ラーニング・アドバイザー」の大学院生5名が協力参加しました。ラーニング・アドバイザーは、大学院での現在の研究の様子や、研究テーマに興味を持った経緯等、これまでの自分の学問的な道のりを語り、研究室選びや海外留学等に関する学生からの質問に答え、ラーニング・アドバイザーの日頃の活動である図書館の「学生サポートデスク」の紹介をしました。大学院生の経験談やアドバイスは好評であったとともに、翌日には授業の履修学生が「学生サポートデスク」に相談に訪れる等、授業と図書館の連携によって実際の図書館サービスの利用に結び付いた良い事例ともなりました。

・授業最終回のポスター発表

2025年1月の授業最終回では、学生ひとりひとりが1年間の学修プロセスと今後の学修の方向性をまとめたポスター発表をしました。自分の関心テーマを掘り下げていくにあたり図書館で借りた本が良いヒントになったと、図書を持参して紹介している学生もあり、図書館の蔵書がこの授業を通して学生の学びに実際に活かされたことがわかりました。また、全体を通してどの学生の発表にも1年間の学びの成果と成長が表れており、授業支援に携わった図書館職員一同、図書館がこの授業に貢献する機会を得て1年間試行錯誤しながら臨機応変に取り組んできたことが無事に学生の学修成果につながったことに喜びと安堵を覚えました。



授業最終回のポスター発表の様子

・図書館職員の関わり

図書館職員は年間を通して、教育機構支援課との連携のもと、施設予約・機材等の準備・会場設営対応、また授業中は業務の合間に随時様子を見ながら補助的な対応を務めるなど、授業の円滑な進行を支援しました。

特にワークショップの時間は、図書館の通常の利用者がいるオープンな場での授業であることから「学問探究チュートリアル」授業の受講生以外の図書館利用者の反応にも気を配って見回りをしました。授業中、受講生以外の複数人の学生が立ち見あるいは隣接エリアの席から、教員の学究人生紹介プレゼンテーション等や学生の発表を興味深く見ている様子が見られました。逆に、全く普段と変わらない様子で図書館を利用している学生も多く見られ、授業の実施が違和感なく自然に受け入れられていることが窺えました。一部、チャットフレームの席を授業時間帯に利用して良いのか迷っている学生がいたため、その次の回から授業の予約時間帯を書いた掲示や、館内の代わりのスペースを案内することで対応しました。音の影響については、授業会場の2階から吹き抜け構造となっている3・4階（会話不可の静かなフロア）を見に行き、2階でマイクを使用した場合には3階まで聞こえるが、通常の会話の声は聞こえず、4階ではいずれの声も聞こえないことを現場で確認しました。

このように通常の図書館利用の支障にならないよう配慮することは当初の「サービス方針」にも挙げており、今後も留意してまいります。

・図書館運営上の相乗効果

授業会場として活用されたラーニング・スクエアはもともと、2011年9月に、「インプットからアウトプットまでの知的創造活動と、交流、協同のトータルサポートをする」という基本的な考え方のもと、

- ・学生が気軽に集い、学び、教え合う学びの空間
- ・多様な学習スタイルに応じて姿を変える空間
- ・学生同士の交流や諸活動の「見える化」により知的好奇心を刺激して学びの相乗効果を生み出す空間

というコンセプトでスタートしたオープンな空間であり、中央図書館に入っただけのアクセスしやすいフロアにあります。その後、数年をかけて徐々にリニューアルし、現在の形に至ります。これまで図書館として整備・提供してきた空間が、その本来のコンセプトにまさに合致するような形で「学問探究チュートリアル」の授業において十二分に活用されたことは、授業に対して図書館が貢献するのみでなく、図書館の運営上も喜ばしい効果をもたらしました。

たとえば、「学問探究チュートリアル」の授業が毎週図書館で実施されるようになって以降、通常の時間帯にもラーニング・スクエアが賑やかに利用されるようになったという目に見える変化が起きました。

ラーニング・スクエアは以前から会話可能なスペースであったものの、実際は学生達に比較的静かに利用されていました。コロナ禍で一旦静かな空間となってしまったラーニング・スクエアは、通常の運用を再開した後、再び賑わいのある空間に戻ることは難しい課題となっていました。それが、「学問探究チュートリアル」のワークショップで賑やかに対話する授業が行われたことの効果で、受講生以外の学生達にもこの空間の有効な使われ方が理解され、学生達が会話しながらグループ学習をする姿が以前より多く見られるようになりました。授業との連携が、図書館の利用

「つくば型チュートリアル学修」

授業支援

スタイルを好転させる契機となったと言えます。

また、派生的な効果もありました。この授業には大勢の教員が関わっていますが、昨今、電子ジャーナル等の非来館型サービスが増えてきた影響で来館利用する機会があまりなくなった教員にとっては、この授業が久しぶりに図書館を訪れる機会となり、ラーニング・スクエアを利用したことで図書館の印象が新鮮に更新されたと伺いました。このように図書館の新しい機能の有効性を教員に知っていただく機会ともなりました。

3.「チュートリアルの本棚」の設置



「チュートリアルの本棚」

「チュートリアルの本棚」は、「学問探究チュートリアル」の授業を担当するチューター教員からの推薦図書を展示している本棚です。授業が実施されるラーニング・スクエアに隣接する場所へ、2024年5月に設置しました。当初、通常の展示用書架を使って9月までの期間の展示を予定していましたが、チュートリアル学修の広報としても有効であること、「学問探究チュートリアル」の授業の受講生以外の学生も含め、展示図書の貸出実績が好調であることから、筑波大学先端教学推進機構の予算で本棚を新調して2024年9月に展示をリニューアルすることができ、これに伴って通年展示となりました。これまでに無かったデザインで自由にレイアウト可能な、カラフルな木箱を組み合わせで構成した展示となっており、創造性豊かな思考力と行動力で未来をデザインできる力を育むというチュートリアル学修の趣旨に沿って楽しく個性的な展示となっています。

「チュートリアルの本棚」に2024年度に展示した図書は、年度途中追加分も含めて合計80冊となりました。推薦コメント付きのリストが「学問探究チュートリアル」のサイト上で公開されています。

(<https://tutorial.edu.tsukuba.ac.jp/books>)

「チュートリアルの本棚」設置日以降の、2025年3月末日までの貸出実績を調べたところ、全80冊で合計444回の貸出がありました。なお「チュートリアルの本棚」を開始する前から所蔵していた図書について見

ると、過去5年間貸出回数0だった図書が10タイトルありましたが（『風姿花伝』『歴史でわかる科学入門』等）それらの図書がこの展示期間中に合計50回借りられていたことから、「チュートリアルの本棚」の展示効果があったと考えられます。

最後に、2024年度に「学問探究チュートリアル」の授業支援として図書館が実施してきたことをまとめると以下の通りです。

・**図書館の場の提供**：ラーニング・スクエアが本来のコンセプトに沿った形で授業で大いに活用されました。

・**図書館資料の提供**：「チュートリアルの本棚」設置により、チュートリアル学修のPRに貢献するとともに、蔵書が有効活用されました。また、通常の蔵書も履修学生の学びのプロセスで活用されました。

・**人的支援**：年間を通して図書館職員が準備・設営等サポートするとともに、図書館のラーニング・アドバイザーも協力しました。

・**広報・展示への協力**：4月の履修登録期間に合わせた広報協力、オープンキャンパスでのパンフレット配布等を行いました。

図書館は元来、多様な学生が自由に訪れ、自分の関心に応じて資料を探し入手することのできる環境を整えており、学生が多様な分野の蔵書を通して幅広い学問に出会う場であり、個々の思索を深めグループでの学び合いもできる場としての役割を担っております。

つくば型チュートリアル学修と図書館の親和性は高いものとして捉えることができ、本学の新しい教育の形としてこれから長い年月をかけて学内に広がっていくチュートリアル学修に、初年度から関わることができたことは図書館として貴重な経験であり、図書館の学習支援・教育支援として意義深い連携の取り組みとなりました。今後も継続的に取り組んでまいります。

(アカデミックサポート課長 濱田 智恵子)

「つくば型チュートリアル学修」

授業支援

我々は認識のための3つの眼をもっている。狭い科学の眼は限られた認識範囲には有効だけれどもモノコの外面しか見てとれない。科学主義が瞑ってしまった眼を開いてみると、そこにはより広い普遍的な知の様式が広がっていた。

(大庭良介先生)

『眼には眼を』 ケン・ウィルバー

日本について考える時、シンプルに表現された世阿弥のこの本は、大変読みやすく、能楽論であるとともに、日本人の感性や美意識の特徴について考える入門書として、何度も読み返したい名著です。

(加藤光保先生)

『現代語訳 風姿花伝』 (PHP 研究所) 世阿弥

中世以来ヨーロッパの中心として「フランスの精髓」を体現してきた都市パリを、河岸の景観や大聖堂の機能、権力装置や劇場＝文化装置、日常生活の典礼や共和国の記憶などのトピックから多面的に考察した作品。

(葛山泰央先生)

『パリ感覚』 (岩波現代文庫) 渡邊 守章

「若い頃はどんどん失敗してもいいんだ」とよく言われますが、やっぱり失敗は嫌ですね。この本の著者は、失敗から学ぶ事こそが文化や技術の発展に寄与してきた、と主張しています。つまり、失敗を避ける人はたくさんのチャンスを逃している。この本を読んだからといって失敗が怖くなったわけではないですが、ちょっと意識的に挑戦をしてみるようになったと思います。

(粉川美踏先生)

『失敗の科学：失敗から学習する組織、できない組織』
Matthew Syed ; 有枝 春 (訳)

チュートリアルの本棚 から

「チュートリアルの本棚」で推薦されている図書を、
チューター教員のコメントとともに、いくつかご紹介します。
図書はすべて附属図書館で借りることができます。

「役に立たない」学問の筆頭 (!?) である哲学と、哲学を教育することの社会的意義が、軽妙な文体で論じられる。「臆病な悟りの文化」や「ことなかれの優等生主義」に生きる現代の若者についての論評は、学生の耳に痛いかもしれない。国立大学の現状や大学教員の業務についても論じられるので、学生とは別の視点から大学について考える材料にもなる。

(鈴木大地先生)

『哲学してもいいですか? : 文系学部不要論へのささやかな反論』
三谷 尚澄

オックスフォード大学の現職教授である刈谷剛彦先生が、同大学の学生である石澤麻子さんとの間で、オックスフォード大学で行われているチュートリアル学修の方法を実践しながら日本語で紹介した書籍。本学の学士課程高年次ではお手本にしたい、オックスフォード大学で行われているチュートリアル学修の実際を知ることができる本。

(坪内孝司先生)

『教える技術－問いをいかに編集するのか』
刈谷 剛彦、石澤 麻子

物理初学者の誰もがショックを受ける教科書。わずか10ページ程度の第1章を読み切れる大学1年生が果たしているのか。自分は2、3ページで挫折した。朝永の教科書と正反対、物語として引き込まれる面白さはないが、あらゆる無駄を削ぎ落としてエッセンスだけにすると力学ってこうなるんだろうって思う。挫折の味を知りたい1年生に。

(中務孝先生)

『力学』 (ランダウ=リフシッツ理論物理学教程)
ランダウ・リフシッツ

皆さん、蚊はお好きですか？
刺されると痒くてたまらないし、その上、危険な病原体を媒介する。そして、羽音。あれは邪悪そのもの。おまけに素早い。私は苦手です。ところが、視点を変えてみると。蚊の口吻（血を吸う口）はとても巧妙につくられていて、痛くない注射針開発に貢献しています。共生細菌や遺伝子組換えによる生物学的防除への期待も。一読すれば、蚊へのリスペクトが高まること間違いなし。蚊の研究者が蚊への愛を熱く語る一冊。

(棚橋沙由理先生)

『あなたは嫌いかもしれないけど、とてもおもしろい蚊の話』
三條場 千寿、比嘉 由紀子、沢辺 京子

「つくば型チュートリアル学修」

授業支援

近未来小説。ベーシックインカムが導入され、普通の生活なら労働をしなくても済む社会に生きる一人の女性が主人公。AIやロボットが当たり前な生活に溶け込み、極めて高い生産性のある企業によって社会経済が成り立っている世界をシュールに描いている。近い将来にこんな社会がよいのか望まないのか、それを考えるのに役立ちそうなフィクション。

(坪内孝司先生)

『未来職安』 作刈 湯葉

「博士の愛した数式」の著者の小川洋子と数学者の藤原正彦の対談形式の本です。天才数学者が生まれる3つの条件は必読で、個人的には数学者に限らなくてもいいように思えます。「博士の愛した数式」を先に読むとより楽しめます。映画「奇蹟がくれた数式」でラマヌジャンを知るともっと楽しい。数学者でない私だから言えることなのかも。

(古賀弘樹先生)

『世にも美しい数学入門』 藤原 正彦/小川 洋子

新型コロナのパンデミックにより、社会で変化したことは何か。また、変わらずに重要であるものは何か。従来の前提が問い直されるなか、学際的アプローチにより社会の変化と連続性の双方に着目し、ポスト・コロナの社会のあり方を構想する。異なる分野を研究する筑波大教員による共著書。

(秋山肇先生)

『ポスト・コロナ学』 秋山肇 (編)

「情報理論を分かりやすく教えてくれる貴重な一冊です。数式が出てきますが、情報の本質を教えてくれる書籍であり、最初の部分を読むだけでも価値があります。

(面和成先生)

『情報理論』(ちくま学芸文庫) 渡邊 守章

「哲学者オルテガが、他人と同一であることに快感を覚え成り行きまかせで生きる凡俗な人々＝大衆を批判する書。科学者や医者、技師といった専門家も、細分化された領域に閉じこもり、世界の運命について少しも考えずコミットしようとしないう点で、むしろ大衆の典型である。世界がポピュリズムに席卷されつつある今こそ読み直したい名著。

(鈴木大地先生)

『大衆の反逆』 オルテガ・イ・ガセット著；佐々木 孝訳

本書は、ウェーバーの膨大な業績の中で最も著名なもので、宗教社会学の古典的名著です。資本主義という経済体制の形成過程に、一見すると全く関係のないようにみえる宗教的信仰が深く関与していたとする本書のウェーバーの大胆な仮説は、学問的な推理小説を読んでいるような知的興奮を覚える著作です。決して読みやすい文体ではありませんが、是非、一読してほしい著作です。

(山中弘先生)

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
マックス・ウェーバー (大塚久雄訳)

第一線で活躍する化学者が、どういう思いで研究に取り組み、どういうきっかけで新たな発見につながったのかを自身の言葉で紹介されている短編集。

(一戸雅聡先生)

『化学者たちの感動の瞬間：興奮に満ちた51の発見物語』
有機合成化学協会編

読み終わった時に、この続きを読みたいと思わせる未完の名著。物理学を定義することは不可能だけれども、無定義のものを語るこの本全体で「物理学とは何だろうか」の答にするという、禅問答かというような書き出しで始まるが、歴史書を読むように引き込まれる。

(中務孝先生)

『物理学とは何だろうか 上・下』(岩波新書) 朝永 振一郎

〈生成子たち〉の永劫の転生の旅を通して、近代的自我の「個性」や「主体性」や「自己意識」の起原を浮き彫りにした作品。

(葛山泰央先生)

『自我の起原：愛とエゴイズムの動物社会学』(岩波現代文庫) 真木悠介

結婚相手は自分が選べないほうが幸せ!? 人生は日々の選択の積み重ね。何かと選択肢が増えていく現代、どのような選択肢があるかが生物にとって幸せなのか? コロンビア大学ビジネススクール教授が、20年以上の実験と研究に基づき、「選択」をめぐる生物の本能に迫ります。盲目で移民という自身の過酷な状況も「選択」によって乗り越えたという著者の研究は、NHKの「コロンビア白熱教室」でも大きな話題になりました。

(事務局)

『選択の科学』 シーナ・アイエンガー

3 フォーカス (2024 年度の特徴的な活動・事業)

1. 書架工事等による資料利用環境の向上

1. 集密書架の新設・既存書架の改修

中央図書館では2024年11月から2025年3月にかけて以下の書架工事等を実施しました。

・11月～3月：

中央図書館新館3階・4階の既存の固定書架27台を解体・撤去し、そのスペースに手動集密書架58台を設置しました。

これにより、このフロアの書架の収容可能冊数が約2倍（棚1段あたり30冊として計算上約6万冊増加）となりました。

長年、書架に隙間なく図書を詰め込んだ状態となっており、書架から図書を取り出す際も、書架に図書を戻す際も、利用者・図書館職員双方が苦勞していましたが、この工事により書架にゆとりが生じ、その問題が解消しました。合わせて、これまで書架が混んでいたためやむを得ず周辺の書架へ分散して置いていた地方史関係の図書を、新しい書架では地方ごと・都道府県順にまとめて並べることができ、資料を探しやすくなり利便性が向上しました。



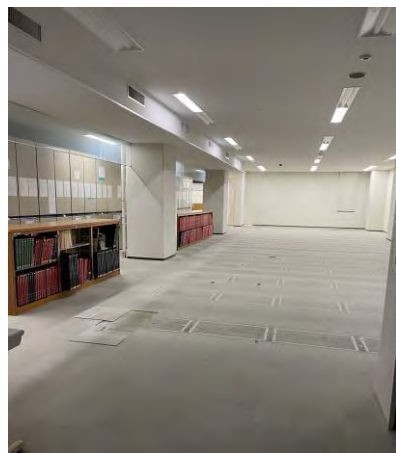
新館3階書架（工事前）

・1月～3月：

中央図書館本館1階の電動集密書架は、かねてより老朽化に伴って故障が頻発する問題があったため、その一部（書架20台）について電動式から手動式への改修を行いました。以前は故障の都度、職員が手動で書架を開閉し図書を出納していましたが、改修により、利用者が自分で書架から資料を取り出せるように改善できました。

これらの書架工事は長期間にわたるため、工事範囲にあたる資料について、極力、利用停止となる資料を少なく抑えるよう工程を工夫しました。たとえば、新館4階の資料を外部倉庫へ移し既存書架を撤去、新書架を設置した後、3階の資料は外部倉庫ではなく4階の新設書架へ仮置きすることで利用可能な状態を維持し、工事期間中に外部倉庫で保管する資料を大幅に減らすことができました。

また、館内掲示や図書館Webサイトで工事予定を早めにお知らせし、工事中的実際の様子を右のような写真とともにXで伝えるなど、利用者向けのタイムリーな広報に努めました。



新館4階 既存書架の解体・撤去

2. カビ問題の対策

中央図書館および医学図書館では同じく2024年11月から2025年3月にかけて、空調設備工事や専門業者による資料のカビ拭き取り・燻蒸作業等を実施し、資料のカビ対策を行いました。

これにより、長年の懸案であったカビ問題に対応し、利用者の資料利用環境の向上に資することができました。

今後も引き続き良好な利用環境の維持に努めます。

（アカデミックサポート課長 濱田 智恵子）



新館3階書架（工事後）

3 フォーカス (2024 年度の特徴的な活動・事業)

2. 中央・大塚図書館に防音ブースを設置

1. 概要

新たな学習空間の整備を目的として、2024年11月に中央図書館と大塚図書館に防音ブースを設置しました。中央図書館には1人用と4人用を1台ずつ、大塚図書館には1人用を1台設置し、それぞれ11月6日と11月27日に利用を開始しました。

1人用ブースの名称は、中央図書館ではオンライン授業のほかに発表練習等での利用が見込まれることから「発話個室1」に、社会人大学院生の利用が多い大塚図書館では「Webミーティングブース」としました。また、中央図書館の4人用ブースは、「セミナー室E」として運用することにした。施設の予約は、研究個室等と同様にオンラインで予約できるように設定を行いました。



中央図書館

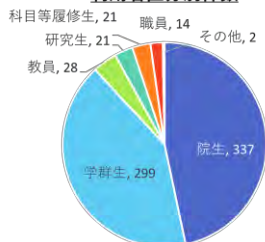


大塚図書館

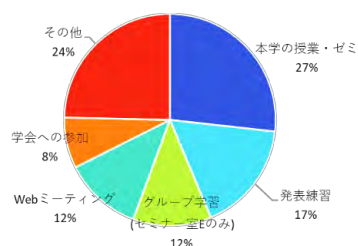
2. 利用状況

約5か月間（2024年11月～2025年3月）で3施設合わせて722件（延べ1,113名）の利用がありました。利用後に実施したアンケート（回答数：141件）によると、主に本学の授業やゼミ、発表練習、Webミーティングなどの目的で利用されています。また、ブース内の環境や利用時間、予約方法に関して90%以上の方から使いやすい・問題ないとの回答を得ました。加えて「オンライン授業で利用したが、環境がよかった」「集中して発表練習できる」などの好意的な声を多数いただきました。

利用者区分別件数



利用目的(アンケート回答より)



(利用者支援担当 上村 悠)

3. 大学図書館職員長期研修を一部対面形式で開催

1. これまでの開催状況

筑波大学では、毎年夏に大学図書館職員長期研修を開催しています。この研修は全国の大学図書館・関係機関の中堅職員を対象に、講義やグループワークを通して、「学術情報に関する最新の知識を教授するとともに、図書館経営・情報サービスの在り方について再教育を行い、職員の資質とマネジメント・企画等の能力の向上を図ることにより、大学図書館等の情報提供サービス体制を充実させること」を目的とするものです。2019年度までは全日程を対面形式により開催していましたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により開催中止、以降2021年度から2023年度までは全日程をオンライン形式により開催していました。

2. 2024年度の実施状況

通算55回目の開催となる2024年度は、対面とオンラインを組み合わせ、前半8日間をオンライン、後半3日間を対面（会場：筑波大学中央図書館）として開催しました。

対面とオンライン、それぞれの利点を生かした構成で実施することができ、受講生からは多くの肯定的な感想が得られました。特に演習においては、現状分析や企画立案の手法を学ぶワークショップ（オンライン）の後に、その手法を活用した班別討議（対面）が行われたことで活発な意見交換が促され、受講生からも有意義な議論ができたとして大変好評でした。



班別討議の発表の様子

3. 今後に向けて

2025年度は再度一部対面形式、2026年度は全日程オンライン形式での実施を予定しています。実施状況や、受講生・推薦機関の声も確認しながら、よりよい研修が実施できるよう検討していきます。

(企画渉外担当 若山 勇人)

3 フォーカス (2024 年度の特徴的な活動・事業)

4. 2024年度特別展「忠孝一本 – 江戸時代のモラリティ」開催

1. 特別展概要

2024年10月29日から11月22日まで、中央図書館貴重書展示室において「忠孝一本 – 江戸時代のモラリティ」を開催しました。

今年度の特別展は、附属図書館研究開発室室員である芸術系・水野裕史准教授の企画・立案のもと、人文社会系・井川義次教授、谷口孝介筑波大学名誉教授に協力を得て資料の選定等を行い、附属図書館特別展WGが実施に当たる体制で開催されました。

本展では、江戸時代の人々の生活や価値観、およびその文化に息づいていた道德観について具体例を紹介しました。「忠」とは君臣関係、「孝」とは親子関係の在り方を示す儒教的な概念であり、それらに関する附属図書館所蔵の貴重な資料40点を展示しました。会期中には、学内外から1,319名が訪れ、古の人間関係に思いを馳せながら貴重な資料を観覧しました。

2. 展示内容

展示は4部構成で行われました。第1部『帝王学・『貞観政要』と『帝鑑図説』』では、政治の手本とされた『貞観政要』と帝王学の教科書とされた『帝鑑図説』を中心に解説しています。特に、儒教的価値観が反映された『帝鑑図説』が、フランス革命にも影響を与えていたという点は、非常に興味深い事例です。

第2部『『孝経』と東アジアの孝子伝』では、「孝」の概念を体系化した『孝経』や、子の親に対する関係性を美談とした『二十四孝』などを解説しています。『二十四孝』は、日本を含む東アジア圏において広く流布し、各国の文化や価値観に応じて「孝」の理解が独自に変化している点も示されています。

第3部「地方の孝子伝」では、日本国内に伝わる「孝子伝」を紹介しています。第5代将軍徳川綱吉による孝行奨励施策により、親孝行をした子どもが表彰され、その内容が孝子説話として各地で刊行されるようになりました。なかには親に尽くす行為が過剰に感じられるものもありますが、親子関係が希薄になりがちな現代においては考えさせられる内容が多く含まれています。

第4部「江戸時代の教育 藩校と寺子屋」では、藩校と寺子屋で多く使用された資料を紹介しています。藩校は藩士の子弟の人材育成を目的とし、水戸藩の「弘道館」などは代表的なものです。一方、寺子屋は庶民の子どもたちの教育機関で、「往来物」などを教材として、実用的な教育が行われていました。

3. 特別講演会

会期中の11月6日には、芸術系・水野裕史准教授による「和漢の学問を支える神」、人文社会系・井川義次教授による「儒教概念受容に関する東西の特殊性について」の特別講演会を開催しました。

水野准教授は、学問の神様として崇拝されている「菅原道真」と、儒教の祖である「孔子」の肖像が、国内で祀られてきた様子等を紹介されました。井川教授は、フランス革命と『帝鑑図説』の関係を中心に、興味深い講演をされました。当日は、学内外から33名の参加があり、講演会後には貴重書展示室にてギャラリートークも行われました。

4. 図録とWebページ

特別展をより理解していただくために、展示資料の解説を中心とした図録を作成しています。作成に当たっては、企画に携わった先生方が執筆し、編集および校正については特別展WGが行っています。図録は会期中の配布に加え、Webページからも電子版を公開し、多くの方々に資料として活用されています。また、展示内容に合わせたWebページを作成し、様々な情報を発信しています。

2024年度筑波大学附属図書館特別展については、以下のサイトをご覧ください。

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/2024>



(古典資料担当専門職員 大久保 明美)

4

職員の活動 ①研修参加報告

1. 障害者サービス担当職員 養成講座（入門）への参加

1. 研修概要

2024年6月6日（木）～7日（金）に日本図書館協会において開催された標記研修に参加させていただきました。対面と後日の動画配信の2種類の参加方法がありましたが、私は対面での参加でした。

8名の講師の方々による講義は

1. 障害者サービスの理念・利用者・サービス・制度
2. 障害者サービス用資料の特徴と入手方法（視覚障害者の情報機器を含む）
3. 「サビエ図書館」の使い方
4. 視覚障害者の理解と配慮すること
5. 国立国会図書館障害者用資料検索「みなサーチ」及びデジタル化資料の全文テキストデータの利用方法について
6. 聴覚障害者への図書館サービス
7. 高齢者・障害のある子ども・知的障害者・肢体不自由者への図書館サービス
8. 実際のサービスにつなげるために ～PR、サービスのコツ、職員の役割～

という内容で、視覚障害のある方に関する話が多くなりつつも他の障害・困難にも目を向けるものでした。

2. 研修に参加して

会期が2日間あることにより、上記プログラムの通り多様な話を伺うことができ、視野が広がったと感じます。休憩時間にも、他機関の障害のある利用者向け広報物の展示を拝見したり、視覚障害当事者の講師の先生が持ち込まれた読書補助機器等（私物含む。最も高価な点字ディスプレイは約60万円！）を実際に使われているところを見せていただいたりと、貴重な機会をいただきました。

具体的な道具やサービス、配慮の仕方についても多々伺いましたが、4月から新しく担当になった者として最も印象に残ったのは、「障害のある利用者からのサービス依頼・要望が無いことは、障害者が居ないことを意味しない。障害者サービスがあることを広報で積極的に周知し、さらには自分が読書に困難のある状態（未自覚の学習障害等）であることを認識していない人にも届くサービスを目指す」という考え方でした。今後の指針としていきたいと思います。

（多様化支援担当 田村 香代子）

2. 令和6年度茨城県図書館協会初任者研修会 （第1回、第2回）への参加

1. 概要

2024年6月14日と7月24日に、茨城県図書館協会初任者研修会に参加しました。

第1回（対面開催）では、図書館サービスの基本的な考え方と、著作権法に関する講義が行われました。前半では、辞書的な定義や理念、指針の文書を時系列で確認しながら、図書館サービスの「変わらない根幹」、時代の変化に応じて「発展・進化してきた部分」を整理しました。続く著作権法の講義では、その基本構造や最新の動向を概観し、それが図書館サービスとどう関わるかを学びました。特に著作権法は、社会や技術の影響を受けやすい分野であるため、法の理解・遵守にとどまらず、必要に応じて立法への働きかけや情報発信を通じて、主体的に関わっていく姿勢も求められる点が印象的でした。

第2回（オンライン開催）では、国立国会図書館が提供するオンラインサービスや、レファレンス体制について学びました。講師の方が一貫して伝えていたのは、まず実際にサービスに触れてみることの大切さです。例えば、データベース検索の表示や操作性は、使ってこそわかることが多く、試行錯誤の中で得た経験が、レファレンス対応の力につながることを改めて実感しました。利用者の視点を理解し、より良いサービス提供に結びつける姿勢が、両回に共通するテーマだったと感じています。

2. 研修を踏まえて

今でも鮮明に覚えているのは、研修会場に入り、約60名の参加者を目にした瞬間のことです。入職前は身近に図書館関係の方がいなかった私にとって、公共図書館など館種は異なっても、図書館の理念に共感しながら働く「仲間」がこんなにもいるという事実は、とても新鮮で、心強く感じました。対面開催ならではの良さだと思います。

図書館としての連帯感を得ると同時に、大学図書館の特性や独自性を改めて強く意識するようにもなりました。今後、日々の業務の中でそうした違いを肌で感じていくことになるのだと思います。今回の研修で学んだ、図書館としての基本的な機能や役割を大切にしつつ、利用者のニーズや環境の変化に柔軟に 대응していけるよう、学び続ける姿勢を忘れず、自分なりの力を着実に積み重ねていきたいと思っています。

（利用者支援担当 又吉 うめ乃）

4

職員の活動 ①研修参加報告

3.「大学図書館員のためのIT 総合研修」への参加

2024年8月28日から30日にかけて、国立情報学研究所主催の「大学図書館員のためのIT総合研修」へ参加しました。この研修は大学図書館員などがサービスを提供する上で必要なIT技術の理解を深めることを目的としたものです。今回のテーマは「Webコンテンツ公開方法の理解と実践」でした。

1. 講義

本研修は講義と実習で構成されていました。講義では東京大学の大向一輝准教授をはじめ、実習でファシリテーターを務めた方々も講師を担当されました。GitHubというオンラインプラットフォームの基礎知識や、Webサイトの仕組み、Webアクセシビリティについて、HTML/CSSの基本についてなど、受講者のレベルに合わせた内容となっていました。特に印象に残った講義は、HTML/CSSの基本についてです。「HTMLが骨格、CSSが肉體、JavaScriptが表情のようなもの」という説明を聞いて、より理解がしやすくなりました。

2. 実習

実習では個人ワークとグループワークが行われました。個人ワークではVisual Studio Codeというコードエディタを用いてHTMLとCSSを記述し、GitHubに共有するという作業を行いました。講師の方の指示についていくことができず焦ったこともありましたが、ファシリテーターの方々のサポートもあり、作業を無事終えることができました。

グループワークでは、HTMLやCSS、JavaScriptを用いてWebサイトの作成を行いました。私のグループでは7月に新紙幣が発行されたことと関連付けて、「新札発行記念図書館フェス」という架空のイベントサイトを作成しました。難しいことが多かったですが、メンバー内で質問や意見交換をして完成させることができました。

3. 研修に参加して

私は図書館システムに関する業務に携わっていますが、今回の研修で新たに学ぶことが多く、今後の業務に活かしていきたいと感じました。また、他大学の職員の方々と交流できたことも貴重な経験となりました。最後に、今回の研修でお世話になった皆様や、送り出してくださった附属図書館の皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。

(デジタルライブラリ担当 中尾 拓夢)

4. 湘南リトリート2024夏：若手ライブラリアンによる将来のOA等施策調査検討合宿

1. 概要

2024年8月30日～9月1日にかけて、国立情報学研究所主催の「湘南リトリート2024夏：若手ライブラリアンによる将来のOA等施策調査検討合宿」に参加しました。本合宿は、「令和6年度に実施しているオープンアクセス(OA)(海外)調査の報告や国内の政策等を踏まえ、今後大学図書館はどのような方向に進んでいけば良いか、具体的にどのようなアクションを取れば良いか、検討・議論を深める」こと、「今日のオープンサイエンスとデータ駆動型研究の推進、教育のデジタル・トランスフォーメーションに即した機能を有する『デジタル・ライブラリー』の2030年までの実現に向けて、『2030 デジタル・ライブラリー』推進に関する検討会」委員や、「ライブラリー・スキーマ」策定に関する有識者等による講義・報告を踏まえ、OA 推進の観点から、大学図書館の今後の可能性や展開、意欲的な将来像を探る」ことを趣旨としています。会場となった湘南国際村センターには全国から48名もの図書館員が集まり熱い議論を交わしました。

* ライブラリー・スキーマ：物理的に存在する旧来からの大学図書館に、OPAC、電子ジャーナル、データベース、リポジトリなどの新しい要素も含め、図書館の構造と機能を論理的に定義したもの

2. プログラム内容

1日目	合宿の趣旨説明、議論の方向性説明、「『2030デジタル・ライブラリー』推進に向けたロードマップ」の概要説明、グループディスカッション、講義（海外訪問調査報告）
2日目	ライブラリー・スキーマの概要説明、講義（ライブラリー・スキーマの事例報告）、グループディスカッション、成果発表にむけた準備
3日目	成果発表および講評

3. 研修に参加して

他大学の図書館員と対面で議論するのは図書館員になり初めての機会でしたが、3日間の合宿を通して多種多様な意見交換を交わすことができ、各大学の事情や特性を知ることができたほか、図書館員としての繋がりを構築することができました。筑波大学でのデジタル・ライブラリー実現に向けて、今後とも業務に努めていきます。

(リポジトリ担当 大石 柁洋)

4

職員の活動 ①研修参加報告

5. 2024年度大学図書館職員短期研修への参加

1. 概要

2024年10月22日（火）から25日（金）にかけて、2024年度大学図書館職員短期研修に参加しました。本研修は、大学図書館等の活動を活性化するため、大学図書館等の職員が、今後の図書館の企画・活動を担う要員となる上で必要な、図書館業務の基礎知識・最新知識を修得することを目的として開催されています。2024年度は京都大学附属図書館での対面開催でした。研修は11の講義と3日間のグループ討議およびその成果報告から構成され、京都大学附属図書館も見学させていただきました。

2. 研修内容

講義は、大学図書館の現状と課題から始まり、その後は学術コミュニケーションの動向、電子コンテンツの導入・提供の現状と課題、情報リテラシー教育、目録実務、資料保存等、多岐にわたる内容でした。また、大学図書館職員のスキルアップ法や海外研修経験をお話いただく講義もあり、今後大学図書館職員としてどのように成長していけば良いかを考える貴重な機会となりました。なお、内容の詳細は以下のWebサイトに掲載されています。

(<https://contents.nii.ac.jp/hrd/librarian/2024/result>)

グループ討議では、事前課題で選択した議題について班ごとに意見を出し合い、内容を深めていきました。「オープンアクセス・オープンサイエンスを推進する図書館職員の役割」、「大学図書館の職員として成長する方法を考える」等について各班で討議を行い、最終日に成果報告を行いました。普段さまざまな業務を行っている他機関の職員と交流しながら話し合うことで、新たな気付きを得ることができました。

3. 研修に参加して

遠方の京都での開催のため、約1週間の出張を伴う研修となりましたが、全国の大学図書館等の職員と交流が深められ、とても良い経験になりました。オープンアクセスやライブラリー・スキーマといった、普段の業務等で関わっている用語が、多数の講義で聞かれたことが印象的でした。

最後に、研修への参加を支えてくださった附属図書館の皆様にご礼申し上げます。貴重な機会を与えてくださりありがとうございました。

(電子リソース担当 森島 葉月)

6. 国立大学図書館協会東京地区協会・関東甲信越地区協会合同フレッシュパーソンセミナーへの参加

1. 概要

2024年11月1日に東京大学総合図書館で開催された「国立大学図書館協会東京地区協会・関東甲信越地区協会合同フレッシュパーソンセミナー」に参加しました。本研修は、東京地区および関東甲信越地区の大学図書館に勤務する職員を対象に、大学図書館業務について必要な基礎知識を修得することを目的として開催されました。プログラムは全5コマの講義で構成され、希望者は東京大学総合図書館の見学をしました。本研修には36名の受講生が参加し、所属機関を越えた交流を図ることができました。

< 講義テーマ >

- 1 「大学図書館の現状と課題」
- 2 「利用者サービス・学習支援～東京学芸大学の取り組み～」
- 3 「図書の選書・受入・目録」
- 4 「雑誌・電子リソースの契約とJUSTICEの取り組み」
- 5 「オープンアクセス・オープンサイエンスと機関リポジトリ」

2. 研修に参加して

研修を通して、大学図書館業務が非常に幅広く、時代の変化に応じてその内容も進化し続けていることを学びました。特に、教育の内容や使用機器の変化に伴い、利用者のニーズと資料を利用する環境が多様化している点が印象的でした。

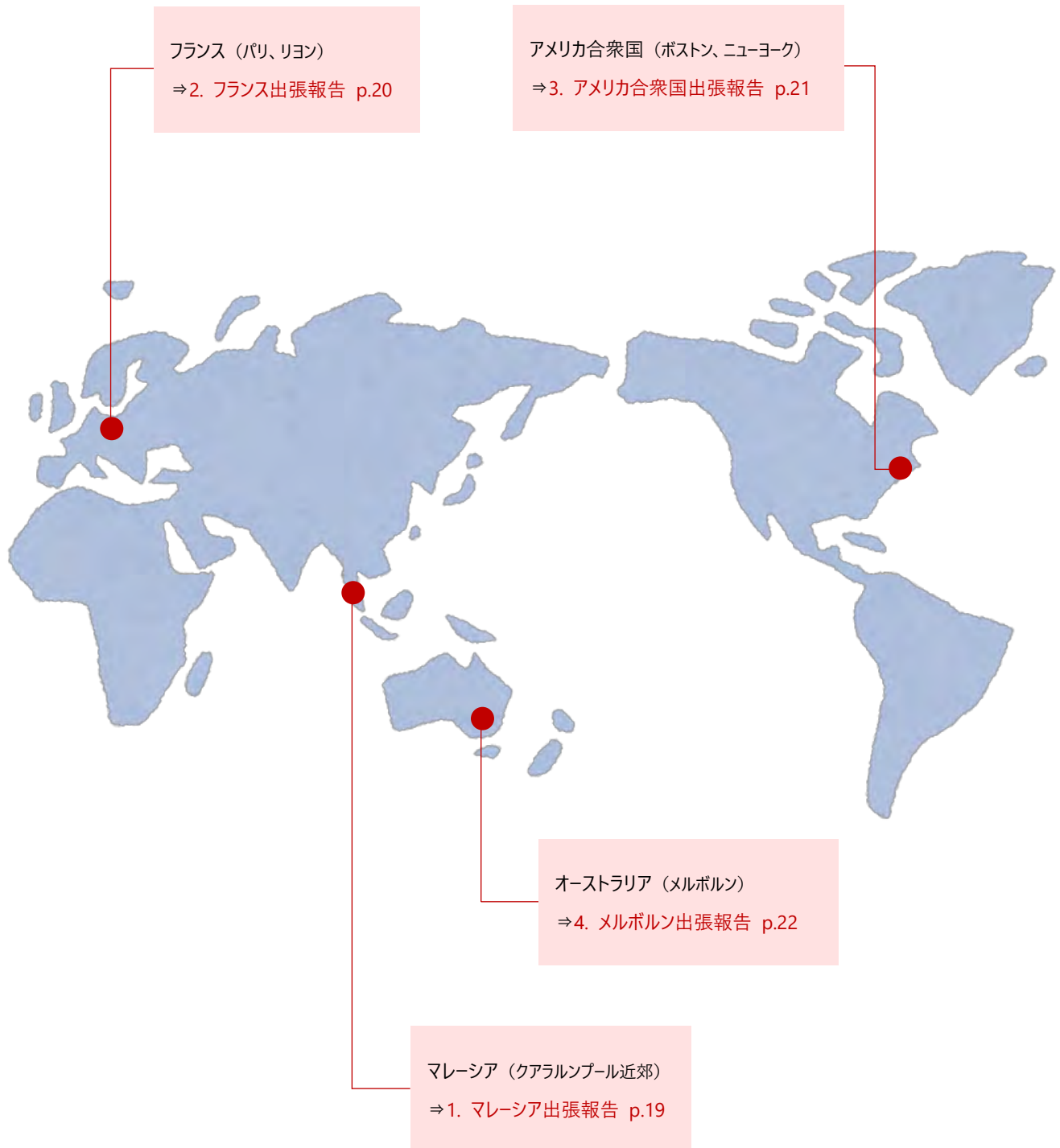
講義では、大学図書館業務の基本的な流れに加え、他大学の取り組みについても学ぶことができました。また、大学図書館に勤務する職員の方から、ご自身のキャリアや業務内容について直接お話を伺うことができ、図書館職員としての働き方や可能性について考える貴重な機会となりました。

今回の研修を通じて、大学図書館の役割がいかに多様であり、時代に応じた変化が必要であることを改めて認識しました。その一方で、変化が必要であるからこそ、図書館の本質的な役割や大切にすべき価値は守り続けるべきであるという視点も重要だと感じました。今後は、学びを支える拠点として、利用者のニーズに応じた柔軟なサービスを提供できるよう努めていきたいと考えています。

(体芸図書館担当 保立 桃果)

4

職員の活動 ②海外出張報告



4

職員の活動 ②海外出張報告

1. マレーシア出張報告

2024年12月2日（月）から12月9日（月）にかけて、人文社会系の三原鉄也助教と中尾拓夢デジタルライブラリ担当係員とともにマレーシアへ出張し、ICADL (International Conference on Asia-Pacific Digital Libraries) 2024への参加と、マラヤ大学中央図書館へのインタビュー・見学、筑波大学の海外分校として2024年9月に開校したマレーシア校への訪問を行いました。

1. ICADL2024への参加



ICADLは、アジア太平洋地域のデジタルライブラリーに関する国際学会のひとつで、今年はマレーシアのクアラルンプール近隣にあるモナシュ大学マレーシア校にて、12月4日（水）～12月6日（金）の3日間の日程で開催されました。26回目となる今回のテーマは“Sustainability and Empowerment in the Context of Digital Libraries”（デジタルライブラリーにおける持続可能性とエンパワーメント）で、各国の研究者や学生から60を超える発表がありました。

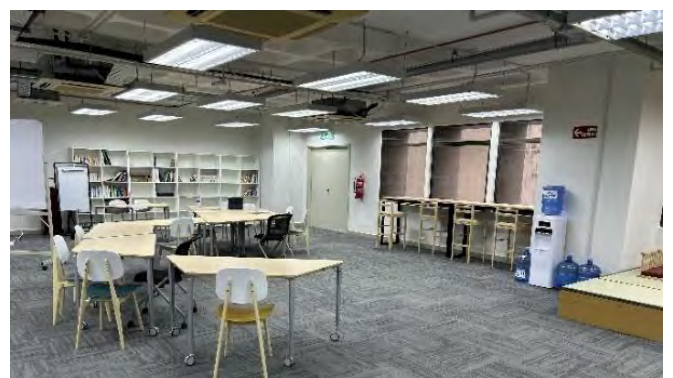
特に印象に残った発表は、2日目のシンガポール国立大学図書館のNatalie司書による基調講演 “Sustainable Innovation in Digital Libraries: Perspectives from NUS Libraries” でした。図書館内に設置された360imxという完全没入型の共同学習スペースを活用したイベントの紹介や、“Historical maps of Singapore” という、デジタル化した古地図コレクションを世界地図上に重ねて比較できるようにしたウェブサイトなど、先進的な取り組みが多数紹介されました。環境への配慮だけでなく、貴重資料や遺跡のデータ化等により、情報資源を将来にわたって利活用できるようにすることも、サステイナブルな取り組みであることに気づきました。

2. マラヤ大学UM Open Scienceへのインタビュー



12月3日（火）午前にマラヤ大学中央図書館を訪れ、Universiti Malaya Open Scienceという部署へインタビューしました。インタビューでは、データリポジトリへの登録を促進するために、教員会議での説明や館内での展示、大規模なイベント等の施策を行っていること、大学のKPIシステム（教員の業績評価システム）で、データセットを業績にカウントできることを伺いました。また、データスチュワードという職種があり、国の養成プログラムと大学独自のトレーニングを受けた42人のデータスチュワードが全学的な研究データ管理の支援を行っているそうです。

3. 筑波大学マレーシア校の訪問



12月3日（火）の午後にマレーシア校を訪問し、筑波大学附属図書館の利用案内を行うとともに、マレーシア校所属の教職員へのインタビュー、校内の見学を行いました。上の写真はマレーシア校のCLS（Creative Learning Space）の様子です。可動式の机や畳でできた自習スペースがあり、講義やコミュニケーションの場になっているそうです。マレーシア校には日本出身の学生もあり、帰省時に筑波キャンパスだけでなく東京キャンパスの大塚図書館も利用できることをメリットと感じていただけたようです。（デジタルライブラリ担当 西 彩花）

4

職員の活動 ②海外出張報告

2. フランス出張報告

1. 概要

海外のオープンアクセス（OA）に関する取り組みを調査するため2025年1月27日から31日にかけて、国立情報学研究所オープンサイエンス基盤研究センター（NII RCOS）の山地一禎センター長に随伴してフランスのパリ・リヨンに赴きました。同地では大きく二つの催しに参加し、日本とは異なる国家レベルでのOA推進体制やオープンサイエンスの実現に向けた国際連携の実情を知ることができました。

2. 日本のOA事情

一つ目のOA推進体制に触れる前に、機関リポジトリを主軸とした日本のOA事情を概観します。日本では2002年の千葉大学を皮切りに、各大学・研究機関で機関リポジトリが続々と整備されました。その役割は研究成果のショーケースとしての意味合いが強く、独自性の高い研究を広く世の中に知ってもらうために、各大学はWebサイトのデザインや構成、記述する情報（メタデータ）にも工夫を凝らしました。本学も2006年に「つくばリポジトリ」の公開を開始しています。

現在では800以上の大学・研究機関で機関リポジトリが構築されています。その多くはNIIによって開発・提供されている共用プラットフォーム（JAIRO Cloud）を採用していますが、運用・カスタマイズは機関単位で行われ、個々の機関がそれぞれ独自に工夫を凝らして活動しています。

3. フランスのオープンアーカイブHAL

一方で、フランスのリポジトリは一つのアーカイブを共有しています。このオープンアーカイブ「HAL（ハル）」はフランス南部の古都リヨンに拠点を構えるCCSD（Centre pour la Communication Scientifique Directe）によって開発・運営されており、152の機関ポータルを通してそれらを発信しています。出張の前半ではCCSDの6名のスタッフから取り組みについてご紹介をいただき、山地センター長からも日本の取り組みを紹介した後、両国のOA事情について意見交換をしました。

HALの特徴として、研究者自身もアカウントを持ち自身の研究成果をセルフアーカイブすることができます。それらは所属情報に基づき各著者の所属機関のポータルで自動的に公開され、研究者自身の業績一覧にも残り続けます。一つの研究成果を登録するだけで、複数の機関リポジトリや研究者データベースに登録するのと同等の、非常に効率的な仕組みが確立しているのです。



一方で、一つのアーカイブを共有しているため研究者自身もその運用に習熟することが求められます。CCSDではオンライン・対面でトレーニングの機会を提供しており、これらを習得した研究者はアンバサダーであることを示すバッジやオープンサイエンスの最新の動向に触れることができるワークショップに参加する機会が得られます。

日本では各機関リポジトリの独自性が強く、機関や国をまたいだ研究成果もバラバラに登録・公開されている状況です。即時OA義務化や研究データ公開への対応に伴いさらに重要性が高まることが見込まれる機関リポジトリを、将来にわたって持続可能な形で運用していく方策を考える際に大いに参考になる事例を持ち帰ることができました。

4. Software Heritage 2025

出張の後半はパリに移動し、ユネスコ本部で開催されたSoftware Heritage 2025 Symposium and Summitに参加しました。

Software Heritageはソフトウェアのソースコードを保存・公開することを目的とする組織およびプラットフォームです。シンポジウムや交流会の席に図書館員の姿はなく、大学等の研究機関の中で情報インフラを担う教員、研究者が主に列席していました。

シンポジウムにはNII RCOSから山地センター長が登壇され、他の登壇者とディスカッションされました。印象的だったのは、科学において再現性を重視する理由は再現性自体のためではなく、再現性が信頼を確保する方法でもあるという言葉です。ディスカッションの中では研究成果、研究データがオープンであることに加え、そのインフラであるソフトウェアがオープンソースであることが信頼性につながるということが繰り返し強調されていました。

ソフトウェアがオープンであることは研究の再現性を保証し、そのことが研究成果の透明性、再利用性の確保につながります。日本におけるオープンアクセス、オープンサイエンスの文脈では論文や研究データといった研究成果のオープン化に目が向きがちですが、それだけでなく基盤となるインフラもオープンであることの重要性に触れることができたことは、大きな気づきとなりました。

今回の出張を通して、日本の中にいるだけでは得られないオープンサイエンス推進に向けた多くの視点を得ることができました。貴重な機会をいただいたことに感謝するとともに、今回の報告が今後の日本の機関リポジトリを考えるきっかけの一つになれば幸いです。

（リポジトリ係長 石津 朋之）

3. アメリカ合衆国出張報告

2025年2月9日から2月17日にかけて、附属図書館職員2名でアメリカ合衆国のボストン、ニューヨークに出張に行きました。本出張の目的はアメリカにおけるオープンアクセス（OA）に関する最新の動向や取り組みなどを調査すること、併せて大学図書館や公共図書館を実際に訪問し、図書館の施設やサービスについて情報収集をすることです。ボストンでは2月13日から15日に開催された第191回米国科学振興協会（AAAS）年次総会に参加し、次いでMassachusetts Institute of Technology（MIT）のHayden LibraryやBoston CollegeのO'Neill Library、Boston Public Libraryを訪問しました。ニューヨークにおいては、New York Public Libraryの本館や分館を訪問しました。なお今回はボストンの出張に焦点を当てて報告します。

1. AAAS年次総会への参加

2025年AAAS年次総会は「明日を形作る科学」というテーマで開催されました。開会挨拶を兼ねて行われたAAASの会長講演は、人類のより良い未来を切り拓く科学の力に焦点を当てたものでした。冒頭ではAAASのCEOのSudip Parikh氏が次世代を担う研究者や学生たちに向けて力強いメッセージを送り、幕が開きました。

年次総会では様々なセッションが開かれていましたが、筆者は東北大学の隅典子氏、英国研究・イノベーション機構のRachel Bruce氏、ブラジルのサンパウロ大学のAlicia Kowaltowski氏といった、多様な背景を持つパネリストによる「How Can Public / Open Access Achieve Equity for Authors and Readers?」というテーマのセッションを聴講しました。現在の学術出版システムは「ペイウォール(有料の壁)」が研究成果の後ろにあるため、学術出版を取り巻く環境は国際的にも不透明で不公平なものになっています。ですがこのような状況だからこそ「誰もが研究を発表でき、誰もが自由にアクセスできる、公平かつ持続可能な学術出版の未来」について、改めて考える意義を強く感じました。大学図書館司書として何ができるのか、何を求められているのかについて考え続けていきたいです。



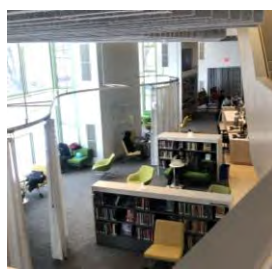
AAASの会長講演の会場様子

2. 各大学図書館へのヒアリング

MIT、Boston Collegeの数名のライブラリアンに対して、OA関連（OA戦略、機関リポジトリ、研究データ管理サービスなど）についてヒアリングを行いました。ヒアリングの中で印象に残った点を挙げます。

MITのDSpaceを使用した機関リポジトリを運用について、リポジトリに登録されている論文に対して読者がコメントできる機能を実装して所属研究者にフィードバックを行っているというお話を伺い、所属研究者と世界中の読者を繋ぐことができるというリポジトリの可能性を改めて感じました。また研究データ管理サービスでは、所属研究者からの相談対応から始まり、現在は統計データの解析支援やGIS(地理情報システム)の利用支援など幅広いサービスを展開されていました。

Boston CollegeではOA出版の推進にあたり、特に人文・社会科学分野においては、大学独自のオープンアクセス基金を活用し、OA書籍の出版に対する助成を行うことで、OA出版への抵抗感を和らげるよう工夫されていました。また研究データサービスに関しては研究データリポジトリ「Dataverse」の運用に加え、データ管理計画の作成支援、日常的なデータ管理方法に関する情報提供など、包括的な支援を行っていました。ヒアリングの中で「小さいサポートの積み重ねによって、最終的にはより良いデータ管理の文化が生まれる」というライブラリアンの言葉が深く印象に残りました。



Hayden Libraryの館内



O'Neill Libraryの正面玄関

3. 本出張を通して

今回の出張ではアメリカにおける先進的なOA関連の取り組みについて実際に見聞することができ、大変勉強になりました。また、国境を越えた大学図書館司書との繋がりが持つことができたことは本出張を通して得られたかけがえのないものになりました。今回の学びを今後の附属図書館業務に活かすことができるよう尽力したいと思います。

最後になりますが、今回の海外出張への参加について温かく送り出していただきました附属図書館の皆様に御礼申し上げます。

（医学図書館 齊藤 真以）

4

職員の活動 ②海外出張報告

4. メルボルン出張報告

1. 概要

2025年2月23日～2月28日に、本学におけるオープンアクセス推進の参考となる情報を収集するため、附属図書館職員2名でオーストラリアにあるMonash UniversityおよびThe University of Melbourneにてインタビュー調査を行いました。

日程	内容
2月24日	State Library Victoria (History of the Library Tour参加)
2月25日	Monash University (インタビュー調査、Matheson Library見学)
2月26日	The University of Melbourne (本部職員による大学案内及び研究支援体制に関する意見交換)
2月27日	The University of Melbourne (図書館職員を含むインタビュー調査、Baillieu Library見学)

※2月23日、28日は移動日。なお、The University of Melbourneでは、本学URA2名とともに調査を実施しました。

2. Monash University

インタビューはResearch Outputs Collection Service (ROCS) に所属する方に対して行いました。ROCSは、同大学の研究成果の収集を行っている組織です。2つのリサーチリポジトリ (Pure、Bridges) について詳しく説明していただき、オープンアクセス (OA) 推進の取り組み、研究データの公開、日本の研究論文への需要について、意見交換を行いました。

OAは複雑な領域であるため、リポジトリ、Read and Publish契約等について明確な説明を重視しているという話が印象に残りました。また、OA担当職員の支援体制については、ROCSのResearcher administrators (大学や学部からの研究者) が公開後の管理、Academic Services Team (専門図書館員) が公開前の支援を行っているそうです。様々な知識・視点から、職員が連携して支援を行うことが重要なのだと改めて感じました。

最後に、Matheson Libraryを案内していただきました。Study spacesには、壁がホワイトボードになっているDiscussion roomがありました。学生がどのように部屋を使用しているのかが興味深いとおっしゃっており、同じ職員として親近感を覚えました。

3. The University of Melbourne

大学の組織構造、人事制度、研究支援体制や、OA政策、図書館での支援体制について詳しい説明を受けたほか、OA政策と実践について議論を行いました。

OAのwebサイトについては、普段の教育の延長線上で「What is Open Access?」といった内容からきちんと整備していること、公募ファンドでの研究については、国の予算で研究している意識が研究者にあり、研究者は成果公開に慣れている、といった話が印象に残りました。議論の中で、周知だけでなく意識改革も必要ではないかという意見があったのですが、The University of Melbourneでは、教員と教員、教員と職員の距離が近い印象を受けました。研究者と積極的にコミュニケーションをとること、例えば要望・疑問等を聞き取る機会を設け、研究者一人一人のOAに対する意識に働きかけていくことも大切なのではないかと思いました。



27日に職員の皆さんとお会ったUniversity House

Baillieu Libraryも見学させていただきました。入館してすぐのところにStudent IT Helpがあり、利用者でにぎわっていました。また、Self-service recording pods and roomsという録音ブースがあるなど、当館にない施設もあり、興味深かったです。

4. 調査を終えて

今回調査を行った2つの大学では、OAについて、研究者への働きかけや支援体制が分かりやすく整備されており、今後の参考になることを多く得られました。調査で得たことを活かし、当館でもOA推進および支援を進めていきます。

(参考調査担当 岩村 良子)

4

職員の活動 ③その他の活動

1. 研修における講師等

開催日	氏名	イベント	テーマ	資料等 URL
2024.6.12	石津朋之	学術情報基盤オープンフォーラム「困った！即時OA」	全体討議	https://www.nii.ac.jp/openforum/2024/day2_rcos-sp.html
2024.7.25	関戸麻衣	デジタルアーカイブ×メタデータ勉強会 #2 (これからの学術情報システム構築検討委員会ユーザーグループイベント)	事例紹介	https://contents.nii.ac.jp/korekara/news/20240717-0
2024.8.28-8.30	松野渉	大学図書館員のためのIT総合研修	Webコンテンツ公開方法の理解と実践	https://contents.nii.ac.jp/hrd/it/2024/result
2024.9.3	大石柁洋	2024年度 リポジトリ担当者の基礎知識研修 (2024年度第3回JPCOAR Webinar)	機関リポジトリの実務と機能	https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/news/2024#news_20240830
2024.11.1	石津朋之	令和6年度国立大学図書館協会東京地区協会・関東甲信越地区協会合同フレッシュパーソンセミナー	オープンアクセス・オープンサイエンスと機関リポジトリ	https://www.janul.jp/ja/regional/fps_tokyo_kanto
2024.11.6	大石柁洋	図書館総合展フォーラム「オープンアクセス加速化事業中間報告会 ～加速後のその先の世界へ～」	オープンアクセス加速化事業採択機関によるライトニングトーク	https://www.libraryfair.jp/forum/2024/1296
2024.11.7	石津朋之	図書館総合展フォーラム 「JAIRO Cloudでオープンアクセスを実践しよう！」	注文の多い利用機関 筑波大学がOAアシスト機能に期待すること	https://www.libraryfair.jp/forum/2024/1254
2024.11.13	田村香代子	令和6年度 障害者サービス担当職員向け講座	大学図書館における障害のある利用者へのサービス	https://www.ndl.go.jp/jp/library/supportvisual/supportvisual-kouza.html
2024.12.24	石津朋之	2024年度 JAIRO Cloud (WEKO3) 操作説明会 (2024年度第5回JPCOAR Webinar)	機関リポジトリシステムに関する事前質問への回答	https://doi.org/10.34477/0002000553 https://doi.org/10.34477/0002000554
2025.01.10	大石柁洋	令和6年度宮崎県大学図書館協議会講演会	「オープンアクセスの実務」	https://www.miyazaki-u.ac.jp/newsrelease/edu-info/6-6.html

4

職員の活動 ③その他の活動

2. 職員研修会

日付	場所	講師・発表者	参加者数
インターンシップ成果報告会			
2025.2.14	中央図書館集会室 & オンライン	実習生 4 名（知識情報・図書館学類 3 年次）	28 名
令和 6 年度研究開発室研究成果報告会			
2025.2.14	中央図書館 チャットフレーム側ギャラリーゾーン	研究開発室室員および協力者	33 名
マレーシア出張報告会			
2025.3.14	中央図書館新館会議室 & オンライン	西彩花、中尾拓夢（デジタルライブラリ担当）	31 名

5 トピックス

1. サービス・活動

日 付	内 容
2024.4.1	「筑波大学研究データポリシー」を策定
2024.4.22	コミュニケーションルームとエントランススペースのリニューアル（医学）
2024.5.13	「学問探究チュートリアル」授業と連動した「チュートリアルの本棚」を設置（中央）
2024.5.29	「学問探究チュートリアル」第1回授業を中央図書館で実施
2024.7.26-7.28, 8.3	オープンキャンパスにて図書館見学を実施（中央、体芸、医学、図情）
2024.8.12	ネットワーク停止に伴う臨時休館（中央・医学）
2024.9.3	マレーシア校学生向けの図書館サービスをまとめたページ “For UTM My Students” を公開
2024.9.3-9.5	館内整備のため臨時休館（各館期間内の1日のみ）
2024.9.18	「チュートリアルの本棚」リニューアル（中央）
2024.10.26-10.27	電気設備点検に伴う全学停電のため休館（中央・体芸・医学）
2024.11.6, 11.27	館内に防音ブースを新設（中央・大塚）
2024.11.16	電気設備点検に伴う全学停電のため休館（図情）
2024.11.24	つくばマラソンに伴う休館（中央、体芸、医学、図情）
2025.1.18-1.19	大学入学者選抜のため臨時休館（中央、体芸、医学、図情）
2025.2.25-2.26	大学入学者選抜のため臨時休館（中央、体芸、医学、図情）
2025.3.11-3.13	館内整備日のため臨時休館（各館期間内の1日のみ）

2. イベント・セミナー・授業

日 付	内 容	主 催	場 所
2024.5.30	アカデミックライティング 2つの相談窓口—その支援内容と利用方法—	CEGLOC Academic Writing Support Desk、中央図書館 学生サポートデスク	チャットフレーム側ギャラリーゾーン
2024.6.4	おりがみ講習会（鶴）	附属図書館ボランティア	チャットフレームC
2024.6.14	JST-SPRING研究発表会	ヒューマンエンパワーメント推進局	チャットフレーム側ギャラリーゾーン
2024.6.25	2024年度第2回 博士のポートフォリオ大公開 + ロールモデル懇談会	ヒューマンエンパワーメント推進局	チャットフレームB
2024.7.1	国際セミナー & トークセッション 意識の描像 ～科学×哲学×アートの邂逅～	鈴木大地（生命環境系）	チャットフレームC
2024.7.31	2024年度第3回 博士のポートフォリオ大公開 + ロールモデル懇談会	ヒューマンエンパワーメント推進局	チャットフレーム側ギャラリーゾーン
2024.8.2	「プロジェクトワーク日本語」発表会	担当教員 吉陽（グローバルコミュニケーション教育センター）	チャットフレームC
2024.9.25	令和5年度社会貢献プロジェクト活動報告会	総務課（地域連携担当）	チャットフレームC

5 トピックス

日 付	内 容	主 催	場 所
2024.10.29	おりがみ講習会（カワサキローズ）	附属図書館ボランティア	チャットフレーム側ギャラリーゾーン
2024.11.27	テキスト文化学研究Ⅰ講演 マンガで伝える震災・社会事象－フィクション・ノンフィクションの両面から	担当教員 三原鉄也 （人文社会系）	チャットフレームC、チャットフレーム側ギャラリーゾーン
2025.1.21	おりがみ講習会（多面体）	附属図書館ボランティア	チャットフレームC
2025.2.7	「プロジェクトワーク日本語」発表会	担当教員 吉陽 （グローバルコミュニケーション教育センター）	チャットフレームC

3. 展示

日 付	内 容	主 催
中央図書館 展示		
2024.4.5～5.5	図画団新歓展示	美術サークル図画団
2024.4.5～5.6	筑波大学写真部 新歓展	写真部
2024.5.13～5.17	そばたん展	学園祭実行委員会
2024.5.8～5.28, 7.17～9.2	LA企画展示「LAさんに大学生活のこと聞いてみた～筑波大学スタートダッシュ編～」	附属図書館ラーニング・アドバイザー
2024.6.3～6.21	PRIDE at Tsukuba～ぶちライブラリー～	ヒューマンエンパワーメント推進局
2024.6.28～7.15	ミニ展覧会 意識の描像～科学×哲学×アートの邂逅～	鈴木大地（生命環境系）
2024.7.6～7.25	筑波大学写真部 夏の展示会	写真部
2024.9.18～10.15	令和5年度社会貢献プロジェクト成果報告展	総務課（地域連携担当）
2024.10.21～10.28	Open Access Week 2024	附属図書館
2024.10.25～11.4	「筑波大学周辺の変遷をたどる」 筑波大学新聞創刊50周年記念企画つくばマップパネル展	筑波大学新聞
2024.11.6～12.6	筑波大学りんごの棚プロジェクト	人間学群学生
2025.1.10～1.30	マナーアップキャンペーン 図書館の本はみんなのもの	附属図書館
2025.1.16～1.28	セクシャルマイノリティ写真展「OUT IN JAPAN @筑波大学」	ヒューマンエンパワーメント推進局
2025.2.27～3.7	附属図書館研究開発室成果報告ポスター展示	附属図書館
2025.3.7～3.21	国際女性デーフェア展示	ヒューマンエンパワーメント推進局
体育・芸術図書館 展示		
2024.4.6～5.5	図画団新歓祭展示	美術サークル図画団
（通年）	壁面マスキングテープアート	芸術専門学群学生、上浦佑太（芸術系）
図書館情報学図書館 展示		
2024.11.1～2025.1.31	ミニ展示「知的書評合戦ビブリオバトル関連資料特集展示」	図書館情報学図書館
2025.3.11～7.31	「浮世絵を読み解く～江戸の人々のくらし～」	図書館情報メディア系時井研究室

5 トピックス

4. 見学・来訪者

日 付	内 容
2024.5.14	成功大学（台湾）学生 26名
2024.7.6	HKUGA（Hong Kong University Graduate Association）（香港） 25名
2024.7.11	埼玉県立越谷北高等学校 103名
2024.8.1	秋田県立秋田南高等学校 43名
2024.8.6	台湾大学（台湾） 25名
2024.9.26	CAMPUS-Asia6 留学生（中国、韓国、タイ、インドネシア） 19名
2024.10.8	前橋育英高等学校 67名
2024.10.16	富山県立滑川高等学校 38名
2024.10.18	新潟県立新発田高等学校 44名
2024.10.22	Japan-Expert（学士）プログラム 9名
2024.11.13	長崎県立長崎北陽台高等学校 20名
2024.11.13	高知市立高知商業高等学校 35名
2025.1.22	千葉県立柏の葉高等学校 44名
2025.3.19	山形県立酒田東高等学校・山形県立致道館高等学校 84名
2025.3.24	東邦高等学校 38名

※全 85 件から抜粋したもの。

5. オリエンテーション・講習会

内 容	対 面		オンライン（リアルタイム）		動画提供	
	回数	人数	回数	人数	回数	人数
新入生オリエンテーション（学群生）	-	-	-	-	1回	2,152名
新入大学院生オリエンテーション（院生）	1回	71名	-	-	1回	15名
留学生オリエンテーション	3回	16名	-	-	2回	38名
新任教員オリエンテーション	資料提供 1回					
図書館の本や雑誌の探し方講習会	-	-	-	-	3回	60名
論文の探し方講習会	1回	8名	7回	210名	18回	522名
自由テーマオリエンテーション	8回	89名	-	-	-	-
科目関連指導	14回	718名	1回	26名	6回	1,619名
その他	7回	329名	2回	100名	3回	47名

※新任教員オリエンテーションは資料アップロードをもって実施とし、参加者数は集計しない。

※「オンライン」はオンライン上での生配信による開催、「動画提供」はアップロードされた動画を視聴する形式での開催。

※「オンライン」開催時に録画した動画をアップロードして提供した場合、「オンライン」「動画提供」それぞれ「1回」と数える。

5 トピックス

日 付	内 容	講 師	参加者数
ライティング支援連続セミナー 実践！レポート・論文の文章術（対面）			
2024.10.17	学術論文とそのほかの文章の特徴	小泉公乃（図書館情報メディア系）	19名
2024.10.24	下書きからパラグラフライティングを目指す	田川拓海（人文社会系）	17名
2024.10.31	疑うことから始めよう ―批判的に考える―	島田康行（人文社会系）	14名
2024.11.14	事実と意見／文字と絵	野村港二（生命環境系）	15名
2024.11.21	レポート執筆から論文投稿へ ～書いた文章を学会に出す基本と注意点～	小野永貴（図書館情報メディア系）	17名
LA（ラーニング・アドバイザー）企画（対面）			
2024.11.15	「キャリアデザインLAB～現役大学院生から見た進路選択のリアル～」	附属図書館ラーニング・アドバイザー	10名
その他の研究・学習支援企画（対面）			
2024.7.17	令和6年度スーパーサイエンスハイスクール（SSH）特別講座 「学術情報の探し方」 （筑波大学附属駒場中・高等学校）	後宮優子、松野渉（アカデミックサポート課）	123名

6. 研修・シンポジウム

日 付	内 容
2024.7.1～7.19	令和6年度大学図書館職員長期研修（受講生 29名）
2024.8.1	職場体験（つくば市内中学校 1校 3名）
2024.8.26～9.6	インターンシップ（筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類 4名）
2025.2.14	インターンシップ（釜山大学校 8名）

7. 会議

日 付	内 容
2024.5.30	つくば市域図書館連携協議会
2024.6.4／9.27／2025.2.21	附属図書館運営委員会
2024.6.7／2025.3.17	附属図書館研究開発室運営会議
2024.6.25（メール）／9.10／2025.2.6	附属図書館収書専門委員会
2024.6.28／12.26	附属図書館ボランティア専門委員会
2024.12.17／12.25／ 2025.1.14～1.20（メール）	附属図書館オープンアクセス専門委員会

5 トピックス

8. 研究開発室

プロジェクト名	担当室員／協力者
ラーニングコモンズにおける学習支援活動の検討	島田康行（人文社会系）、野村港二（生命環境系）、小泉公乃（図書館情報メディア系）、小野永貴（図書館情報メディア系）／田川拓海（人文社会系）、学習支援推進WG（学術情報部）
附属図書館における貴重資料の保存と公開	水野裕史（芸術系）／谷口孝介（名誉教授）、井川義次（人文社会系）、特別展WG（学術情報部）
利用スタイルに適合した次期図書館システムの検討	高久雅生（図書館情報メディア系）、宇陀則彦（図書館情報メディア系）、斎藤未夏（学術情報部）／関戸麻衣、西彩花、中尾拓夢、真中孝行（学術情報部）
デジタル画像の利用促進	和氣愛仁（人文社会系）、宇陀則彦（図書館情報メディア系）、堤智昭（人文社会系）／三原鉄也（人文社会系）、真中孝行、関戸麻衣、西彩花、中尾拓夢（学術情報部）
バーチャル図書館コンテンツの研究開発	小野永貴（図書館情報メディア系）、宇陀則彦（図書館情報メディア系）／松村敦（図書館情報メディア系）、佐藤翔（同志社大学免許資格課程センター）、高野和彰（日本大学芸術学部）、多様化支援担当（学術情報部）
図書収蔵環境の安定化と対策	松井敏也（芸術系）／真中篤子、齊藤真以、渡邊雅子、大越喜公美、木野村和人（学術情報部）、中野実歩（世界文化遺産学プログラム）
筑波大学附属図書館における「デジタル・ライブラリー」の推進—ライブラリー・スキーマ案の検討を中心に—	斎藤未夏（学術情報部）、山口恵里子（副館長）、小泉公乃、村井麻衣子（図書館情報メディア系）／附属図書館デジタル・ライブラリー推進WG（学術情報部）

6 メディアにみる 附属図書館

1. 学内外のメディアに掲載された当館に関する記事

日付	掲載元	メディア	掲載内容
2024.4.3	筑波大学新聞	新聞	困り事の相談先は：学修なら附属図書館へ（学生サポートデスク）
2024.7.8	MILK（知識情報・図書館学類誌）	雑誌	体芸図書館で知る体育と芸術の世界
2024.8.19	文教速報	雑誌	筑波大で大学図書館職員長期研修
2024.9.30	文教速報	雑誌	筑波大図書館がリニューアル「チュートリアルの本棚」通年展示に

2. 筑波大学附属図書館の刊行物

附属図書館年報2023年度
筑波大学附属図書館研究開発室年次報告2023
Prism (Practical Information for your Serendipity and Mind)
No.131 中央図書館学生サポートデスク ラーニング・アドバイザー2024
No.132 CEGLOC Academic Writing Support Desk「アカデミックな価値を持つレポート・論文のつくりかた」ワークショップ参加体験記
No.133 図書館資料の利用 それダメ！のあと、どうする？どうなる？
No.134 2024年度附属図書館LAセミナー「キャリアデザインLAB～現役大学院生から見た進路選択のリアル～」を開催しました！

3. 筑波大学出版会の刊行物

発行日	タイトル	著者
2024.4.19	東アジア冷戦文化の系譜学——一九四五を跨境して	越智博美・齋藤一・橋本恭子・吉原ゆかり・渡辺直紀 編
2024.6.19	もっと知りたい！「科学の芽」の世界 PART9	永田恭介 監修 「科学の芽」賞実行委員会 編
2024.12.24	病誌から考える精神科面接	佐藤晋爾 著
2025.3.7	わが国における制御焦点理論ならびに制御適合理論に関する実証的研究	外山美樹 編著

7 附属図書館 ボランティアの活動

1. 2024年度ボランティア構成

- 2024年度末時点で32名
(●更新：24名、●新規：10名、●年度途中辞退：2名)
コロナ禍による活動休止の影響を受けて減少したボランティアの人数を増やすため、2024年度募集は2月と8月の2度行いました。

2. 活動統計

1 総合案内

- ボランティアカウンター利用者数 399人
(学内者：343人 学外者：56人)
- 図書館見学案内 32件 403人
- 対面朗読 51時間

2 利用環境整備

- シェルフリーディング書架数 3,444連
- ラベル補修 2,476冊
- 図書修理冊数 435冊

3 体芸図書館ポスター整理 494枚

* 集計方法変更

- ・2023年度まで：掲示した枚数
- ・2024年度から：整理した全数

3. 年間行事

1 フォローアップ研修

- 学内施設見学

約5年ぶりの開催となりました。筑波大学アーカイブズを訪問し、貴重な資料や書庫を見学させていただきました。



- 茨城県自然博物館ボランティアとの交流会

茨城県自然博物館のボランティアの皆さんを中央図書館に迎え、互いの活動の紹介や館内見学を行い交流しました。



- 館内研修「図書館アップデート」

コロナ禍による活動休止以降に新しくなったサービスや設備等について説明を受け、2023年秋にリニューアルした貴重書展示室の常設展を見学するなど、知識のアップデートを行いました。

2 ボランティア懇談会

1年間ボランティアの活動報告や、意見交換を行いました。

3 ボランティア講演会

「北米先住民族から見た神話伝承」

講師：木村武史（人文社会系 教授）

なかなか知る機会のない、先住民の独特な神話の世界に触れる講演会でした。

4. 各種活動

1 総合案内

大学見学で来学した高校生や留学生、海外からのお客様などを案内しました。見学者の興味関心に合わせたコースを案内しています。



2 日本文化紹介

留学生に日本文化を紹介する「おりがみ講習会」を3回開催しました。留学生だけでなく日本人学生も参加し、会話を楽しみながら交流を深めました。



3 園芸

2024年度から正式な活動に加わりました。中央図書館入口付近の花壇に花を植え、館内の観葉植物に水やりをしています。



4 ボランティア30周年記念事業

附属図書館ボランティアが2025年6月に30周年を迎えるにあたり、ボランティア有志と担当職員とで式典開催・記念誌発行・ポスター展などの準備を進めています。

(多様化支援担当 田村 香代子)

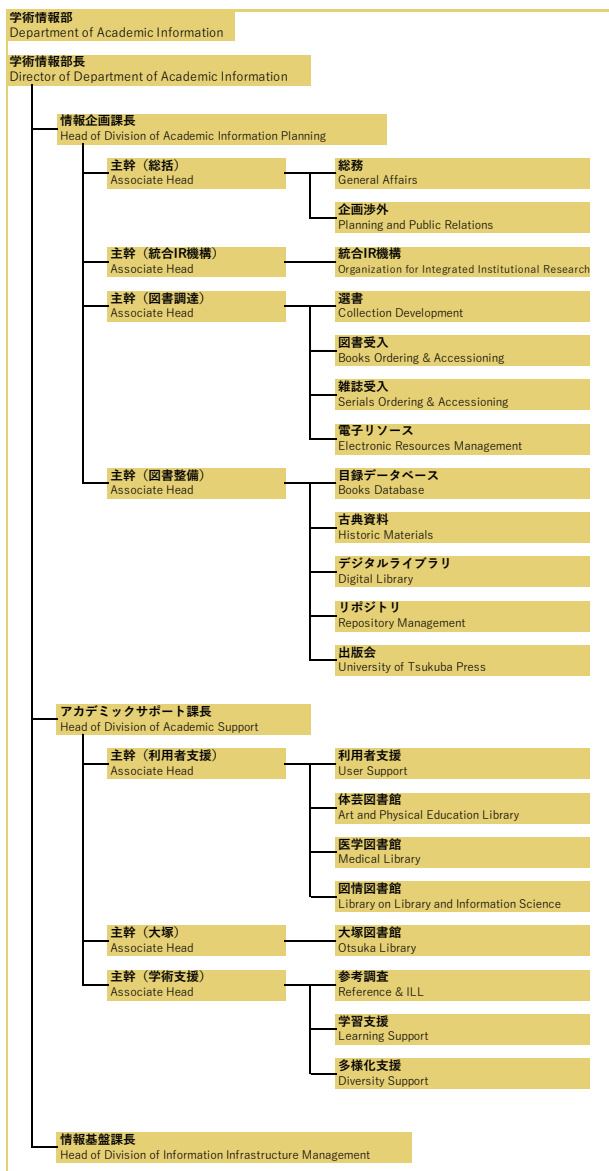
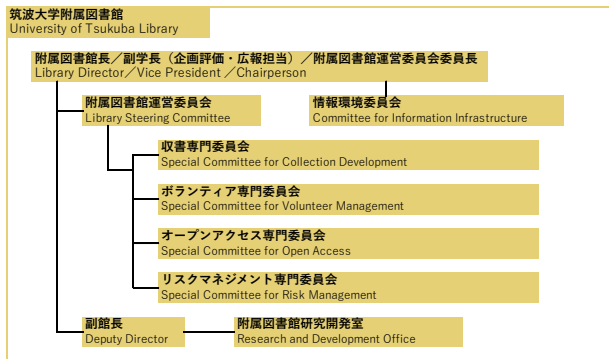
筑波大学附属図書館ボランティア
マスコットキャラクター「ぼらじゃんぱー」



8

組織図・歴代図書館長

1. 組織図

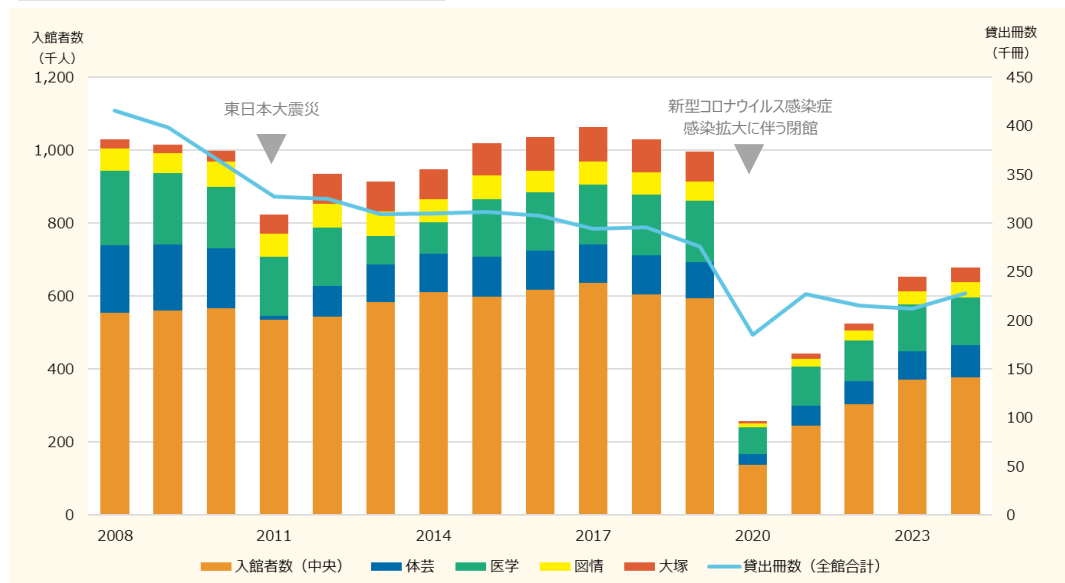


2. 歴代図書館長

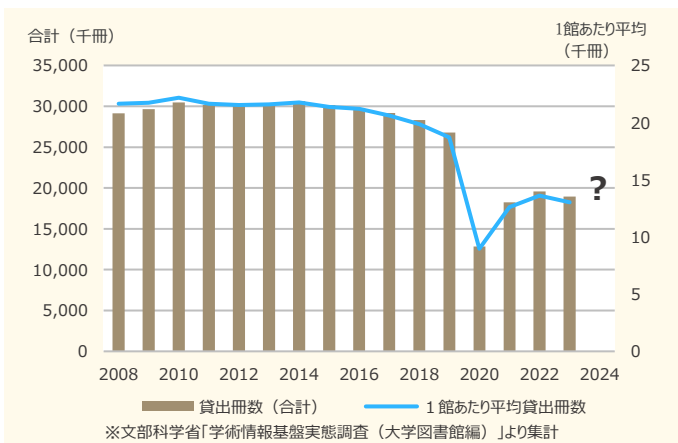
	名 前	期 間	備 考
高等師範学校・ 東京高等師範学校	三宅 米吉	明治32年6月30日 ～ 明治36年9月6日	図書係事務監督
	三宅 米吉	明治32年9月7日 ～ 明治44年4月29日	主幹
	松井 簡治	明治44年4月30日 ～ 昭和4年3月31日	主幹
東京文理科大学	松井 簡治	昭和4年4月1日 ～ 昭和7年3月3日	
	諸橋 徹次	昭和7年3月4日 ～ 昭和20年10月3日	
	能勢 朝次	昭和20年10月4日 ～ 昭和24年5月31日	
	能勢 朝次	昭和24年6月1日 ～ 昭和24年8月30日	
東京教育大学	下村寅太郎	昭和24年8月31日 ～ 昭和29年7月15日	
	中西 清	昭和29年7月16日 ～ 昭和31年3月31日	
	熊沢 龍	昭和31年4月1日 ～ 昭和33年3月31日	
	熊沢 龍	昭和33年4月1日 ～ 昭和35年4月30日	
	肥後和男	昭和35年5月1日 ～ 昭和38年3月31日	
	山崎 宏	昭和38年4月1日 ～ 昭和40年3月31日	
	平塚 直秀	昭和40年4月1日 ～ 昭和42年3月31日	
	酒井 忠夫	昭和42年4月1日 ～ 昭和44年3月31日	
	宮嶋 龍興	昭和44年4月1日 ～ 昭和44年4月27日	事務取扱
	酒井 忠夫	昭和44年4月28日 ～ 昭和46年4月27日	
	橋本 重治	昭和46年4月28日 ～ 昭和47年3月31日	
	武藤 聡雄	昭和47年4月1日 ～ 昭和51年3月31日	
	西谷三四郎	昭和51年4月1日 ～ 昭和53年3月31日	
筑波大学	三輪 知雄	昭和48年10月1日 ～ 昭和49年5月1日	事務取扱
	酒井 忠夫	昭和49年5月1日 ～ 昭和50年4月1日	
	酒井 忠夫	昭和50年4月2日 ～ 昭和52年4月1日	
	高橋 進	昭和52年4月2日 ～ 昭和54年4月1日	
	宮嶋 龍興	昭和54年4月2日 ～ 昭和54年6月9日	事務取扱
	岡本 敬二	昭和54年6月9日 ～ 昭和56年4月1日	
	高橋 進	昭和56年4月2日 ～ 昭和56年5月1日	事務取扱
	郡司 利男	昭和56年5月1日 ～ 昭和60年3月31日	
	松浦 悦之	昭和60年4月1日 ～ 昭和60年4月3日	事務取扱
	升田 公三	昭和60年4月3日 ～ 昭和62年6月8日	
	柳沼 重剛	昭和62年6月9日 ～ 平成元年6月8日	
	小川 圭治	平成元年6月9日 ～ 平成3年3月31日	
	新井 敏弘	平成3年4月1日 ～ 平成5年3月31日	
	北原 保雄	平成5年4月1日 ～ 平成9年3月31日	2期
	斎藤 武生	平成9年4月1日 ～ 平成11年3月31日	
	板橋 秀一	平成11年4月1日 ～ 平成13年3月31日	
	山内 芳文	平成13年4月1日 ～ 平成15年3月31日	
	林 史典	平成15年4月1日 ～ 平成16年3月31日	
	植松 貞夫	平成16年4月1日 ～ 平成22年3月31日	3期
	波多野澄雄	平成22年4月1日 ～ 平成24年3月31日	
	中山 伸一	平成24年4月1日 ～ 平成28年3月31日	2期
	西川 博昭	平成28年4月1日 ～ 平成30年3月31日	
	阿部 豊	平成30年4月1日 ～ 令和3年3月31日	
	池田 潤	令和3年4月1日 ～ 令和5年3月31日	
	西尾チヅル	令和5年4月1日 ～	

1. 推移と分析

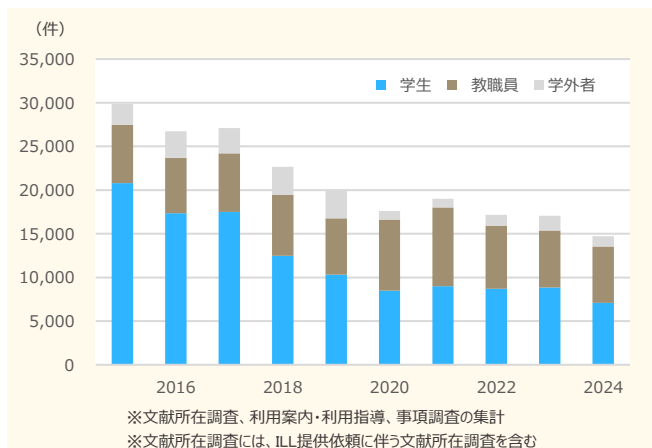
（1-1）入館者数と貸出冊数



（1-2）全国の大学図書館における貸出冊数



（2）質問者別レファレンス対応件数



2008年度からの入館者数と貸出冊数の推移を、(1-1)のグラフで示しました。2023年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴う図書館の利用制限がほぼ解消された最初の年だったものの、利用状況は必ずしもコロナ前の水準に戻っていない、ということを2023年度の年報で紹介しました。2024年度はどうだったのでしょうか。入館者数を見てみると、2023年から増加しているものの、増加幅はゆるやかになっており、やはりコロナ前（2019年度）の7割に満たない状況です。貸出冊数についてはコロナ後も微減傾向が続いていましたが、2024年度は久々にわずかながら増加しました。貸出利用者の身分別の内訳を見ると、2023年度からの増加分の多くの部分を「大学院生」が占めているのが興味深いところです（学群生による貸出冊数は約2,000冊増加したのに対し、大学院生は約10,000冊増加）。また、ここにはグラフを出していませんが、電子資料の利用件数はコロナ禍中に大きく増加した後、必ずしも伸びているわけではありません。

他の大学図書館ではどのような状況なのでしょう。こちらも2023年度の年報で紹介したグラフですが、全国の大学図書館を対象に毎年実施されている「学術情

報基盤実態調査」から、「館外貸出サービス」のデータを取得してグラフにまとめたのが(1-2)です。2021年度、22年度と増加傾向にありましたが、2023年度は再び減少に転じたようです。本学でも他大学でも、ここ数年は安定した傾向が見られないという点では共通しているように見え、貸出以外の数字や、統計に表れてこない部分も含めて、引き続き注視していく必要があるようです。

さて、(2)はレファレンス対応件数の推移を質問者の身分別に追ったグラフです。対応件数は長らく減少傾向にあります。ディスカバリーサービスの浸透や各種検索サービスの利便性向上により文献探索等に関する困りごと自体が減っている可能性もありますが、特に学生からの質問数の減少が顕著（2024年度は2015年度の約3分の1）なのが気になるところです。2024年度は生成AIが大きな注目を集めた年でもありましたが、気軽に自然文での対話ができる生成AIの登場は、学生の行動にさらに大きな変容をもたらすでしょう。図書館もそうした変化に遅れないようしていく必要があります。その中で図書館の果たすべき役割は何なのか、引き続き考えていきます。

2. 利用統計

		中央図書館	体育・芸術図書館	医学図書館	図書館情報学図書館	大塚図書館	合 計
年間開館日数（日）	平日	235	235	235	247	247	—
	土・日・祝日	110	75	110	117	117	—
	合計	345	310	345	364	364	—
入館者数（人）	平日	311,355	79,377	109,519	36,057	25,796	562,104
	（学外者 内数）	13,771	1,048	1,744	2,135	6,726	25,424
	土・日・祝日	65,361	10,254	20,704	5,447	20,987	122,753
	（学外者 内数）	15,196	754	1,482	883	4,860	23,175
	合計	376,716	89,631	130,223	41,504	46,783	684,857
平均入館者数（人）	（学外者 内数）	28,967	1,802	3,226	3,018	11,586	48,599
	平日	1,325	338	466	146	104	—
	（学外者 内数）	59	4	7	9	27	—
	土・日・祝日	594	137	188	47	179	—
	（学外者 内数）	138	10	13	8	42	—
貸出冊数（冊）	1日当たり	1,092	289	377	114	129	—
	（学外者 内数）	84	6	9	8	32	—
	学群生	69,895	14,306	6,610	7,914	196	98,921
貸出利用者数（人）	院生	57,385	11,693	3,476	3,502	7,357	83,413
	教員	22,358	3,489	4,793	2,698	2,629	35,967
	学外者	6,325	881	649	1,294	773	9,922
	その他	13	0	0	0	0	13
	合計	155,976	30,369	15,528	15,408	10,955	228,236
文献複写（コピー）（件）	学群生	30,876	6,455	3,391	3,704	100	44,526
	院生	20,195	4,332	1,465	1,412	2,987	30,391
	教員	5,852	867	1,785	840	908	10,252
	学外者	2,090	295	235	500	331	3,451
	その他	5	0	0	0	0	5
相互貸借（図書）（件）	合計	59,018	11,949	6,876	6,456	4,326	88,625
	学外依頼	2,260	440	1,291	163	725	4,879
	学外提供	1,052	118	213	71	104	1,558
レファレンス件数（件）	合計	3,312	558	1,504	234	829	6,437
	学外借受	1,070	124	80	71	247	1,592
	学外貸出	2,008	288	110	105	115	2,626
資料に関するもの	合計	3,078	412	190	176	362	4,218
	学生	3,844	868	608	227	1,536	7,083
	教員	2,976	593	1,842	337	724	6,472
	その他	532	58	45	61	449	1,145
	合計	7,352	1,519	2,495	625	2,709	14,700
利用案内・指導	資料に関するもの	5,323	1,031	2,248	400	1,881	10,883
	利用案内・指導	2,025	484	247	223	828	3,807
	事実に関するもの	4	4	0	2	0	10
合計	合計	7,352	1,519	2,495	625	2,709	14,700

webコンテンツアクセス数

webサイトアクセス件数	件
学内	203,658
学外	1,414,401
合計	1,618,059

つくりポジトリアクセス件数	件
メタデータアクセス数	1,870,746
本文ダウンロード数	2,371,748

主要な電子ジャーナルフルテキストアクセス件数	件
Cambridge Journals Online	11,696
JSTOR	40,389
Nature	167,584
Oxford Journals	64,378
ProQuest Central	34,647
Science	35,525
ScienceDirect	766,813
SpringerLink	246,969
Wiley Online Library	254,173

主要な文献情報データベースアクセス件数(サーチ数)	件
Business Source Complete	3,396
CAS SciFinder ¹	77,590
InCites-Journal and Highly Cited Data	11,943
Lexis	8,181
ProQuest Central	11,699
Web of Science	178,255
医中誌Web	51,701

主要な電子ブックアクセス件数	件
Cambridge University Press	5,365
KinoDen*	2,342
ProQuest Ebook Central	4,445
Maruzen eBook Library*	6,662
EBSCO eBooks	637
Springer eBooks	17,886
Wiley Online Library	2,002

*タイトルアクセス数（その他はフルテキストアクセス数）

3. 基盤統計

施設環境

(2024年度末現在)

	中央図書館	体育・芸術図書館	医学図書館	図書館情報学図書館	大塚図書館	合 計
建物面積（㎡）	19,330	3,518	2,793	2,848	1,552	30,041
座席数（席）	1,153	369	357	255	133	2,267
利用者用PC台数（台）	122	47	54	33	16	272

図 書

(冊)

	中央図書館	体育・芸術図書館	医学図書館	図書館情報学図書館	大塚図書館	合 計
(和洋区分) 和書	5,951	1,241	687	1,358	496	9,733
洋書	1,800	522	52	41	91	2,506
合計	7,751	1,763	739	1,399	587	12,239
年度受入冊数 (受入区分) 購入	3,991	660	646	702	467	6,466
寄贈	3,477	1,040	62	641	62	5,282
製本	194	63	29	55	54	395
その他	89	0	2	1	4	96
合計	7,751	1,763	739	1,399	587	12,239
(和洋区分) 和書	1,153,202	207,594	98,721	191,908	58,214	1,709,639
洋書	795,158	69,126	80,979	75,891	27,513	1,048,667
合計	1,948,360	276,720	179,700	267,799	85,727	2,758,306

雑誌（冊子）

内訳	年度受入タイトル数			所蔵 タイトル数
	購入	寄贈	計	
和雑誌	612	3,294	3,906	17,949
洋雑誌	174	243	417	13,007
合計	786	3,537	4,323	30,956

つくばリポジトリ 累積登録件数

内訳	件 数
学術雑誌掲載論文	14,793
学位論文全文	7,235
学位論文内容・審査の要旨	12,672
修士論文	617
紀要論文	23,879
研究報告書	5,344
会議発表資料	507
講義資料	221
研究業績目録	23
研究データ	2
貴重書コレクション	408
つくばEフォーラム	95
A-LIEP	65
その他（図書）	1,459
合計	67,320

電子ジャーナル 契約タイトル数

(有料契約誌のみ)

内訳	タイトル数
Cambridge Journals Online	411
JSTOR	958
Nature	24
Oxford Journals	237
ProQuest Central	25,000
Science	1
ScienceDirect	2,300
SpringerLink	2,197
Wiley Online Library	1,342
その他	5,323
合計	37,793

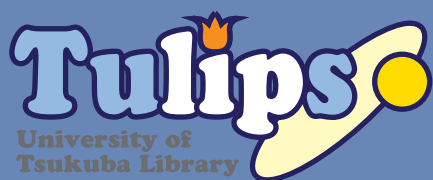
提供データベース・検索ツール

● 主要契約データベース

データベース名
Business Source Complete
CAS SciFinder
CINAHL
D1-Law.com
InCites-Journal and Highly Cited Data
Lexis
ProQuest Central
Web of Science
Westlaw Japan
朝日新聞クロスサーチ
医中誌Web
雑誌記事索引集成データベース
ジャパンレヅジLib
日経テレコン21
毎索
ヨミダス歴史館

電子ブック 契約タイトル 累積数

内訳	タイトル数	
	和	洋
Cambridge University Press	-	1,691
Kinoden	249	9
ProQuest Ebook Central	2	1,042
Maruzen eBook Library	3,016	542
EBSCO eBooks	492	1,076
Springer	-	29,580
Wiley Online Library	-	1,154
その他	26	3,858
合計	3,785	38,952



筑波大学附属図書館

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1

TEL 029-853-2347 FAX 029-853-6052

voice@tulips.tsukuba.ac.jp

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/>

24

令和7(2025)年6月30日発行